

**2009年度
活動報告書**

The Liberal Arts

慶應義塾大学教養研究センター

Keio Research Center for the Liberal Arts

2009年度 活動報告書

慶應義塾大学教養研究センター
Keio Research Center for the Liberal Arts

はじめに

教養研究センター所長 横山千晶

2009年度は日本だけでなく、慶應義塾にとっても教養研究センターにとっても大きな変化の年となりました。政権の交代に伴う今までの事業見直しの中で、高等教育で展開されてきたさまざまな事業と資金援助もその見直しの対象となりました。ただし、教育資金の大幅な見直しが行われることは、かえって慶應義塾にとっても教養研究センターにとっても大きなチャンスとなりました。ルーティンと馴れ合いではなく、本当に大切なものが評価される時代が到来したからです。創立150年から1年たった慶應義塾でも、学部や各研究センターをはじめとし、個々の部署が自分たちの役割とその意義を真剣に見据えるときを迎えています。

思い返せば2008年度に世界中を襲った経済状況や社会的な不安は、慶應義塾大学教養研究センターに教育現場の土台の見直しを突きつけました。教育現場とは机上だけでなく、蓄えた知を生きる力につなげ、同時にその力を他者にも及ぼしていく実践の場です。学び、経験し、そして発信することで他人を巻き込んでいくネットワークを学生も教職員も意識的に作り出していかなければなりません。ある意味で今の社会状況は、既存の学びを「行動する知」として見直し、アカデミック・コミュニティをそのまま「ともに生きるコミュニティ」として立ち上げる機会を提供してくれたのだ、といえましょう。

2009年度は、その土台作りとして教養研究センターは文部科学省の「大学教育・学生支援推進事業」大学教育推進プログラム【テーマA】(教育GP)に申請し、採択され、3年間資金援助を受けることとなりました。採択事業のテーマは「身体知教育を通して行う教養言語力育成」です。

教養研究センターの研究事業の大きな柱である「身体知」研究は2005年度より基盤研究「身体知プロジェクト」として立ち上がり、月一回の研究会を開催しました。1年後の2006年には秋学期集中の実験授業「体をひらく・心をひらく」を開始し、その成果を経て、2007年度は夏季集中講座「新しい文学教育」を開始しました。「身体知教育を通して行う教養言語力育成」の立ち上げには、過去5年間の研究と実践の積み上げがあります。その成果はすべて実験授業に参加してくれた学生と教職員の皆さんが生み出してくれたものです。

学ぶ場とは社会学者のロジェ・カイヨワが述べたとおり「遊ぶ場」でもあります。知的行為も生き抜く力も常に「遊ぶ心」、つまり想像力と精神的な余裕のもとに成り立っています。単位になるかならないか、直接自分の益になるかならないか、ではなく自分の内面と時間をかけて対峙し、他人と時間を共有することに意義があると考え、その思考そのものです。身体知の実験授業では、既存のクラスの外で起こるさまざまな実験的な試みを通して、教室の中では提供してこなかった場と人間関係、そしてコミュニケーションの方法を参加者とファシリテーターがともに模索しました。このような「余裕」の部分は、今まで使ってこなかったからだや思考能力を刺激し、今までつながってこなかった人々とのネットワークを可能にしたのです。

次はこの成果をどのように高等教育の現場に応用していくのか。これが教育GPの目標となります。そしてこのGPの柱となるいくつかのプロジェクトもまた、すでに教養研究センターの事業として実行され、その成果が積みあがってきたものです。

まず2008年度に本格化した「学生の学びの場を考える(通称：学び場)」プロジェクトがそのひとつに挙げられます。メディアセンター(図書館)と連携して、アカデミック・スキルの修了者がピア・メンターとして学生たちの学習の悩みに答えていく「学習相談アワー」も2008年度の試験期間を経て、2009年度から本格的に活動を開始しました。単にピア(仲間)である学生たちに自ら学んできたスキルを

からだと心を使って伝えるだけでなく、ピア・メンターたち同士の密なコミュニケーションもこの「半学半教」システムの構築に大きく寄与しています。2009年度には学生企画をメディアセンターの協力で開催するなど、学びの場の中に積極的に学生がかかわっていく姿は非常に頼もしく、慶應義塾大学の教育現場が彼ら・彼女らの力で変わりつつあります。おそらくこのような教職員と学生をつなぐ学ぶ場の構築の試みは、日本の中でも慶應義塾がパイオニアとなるのではないかと思います。

次に挙げられるのは、義塾の内と外をつなぐ試みです。学術フロンティアの「インター・キャンパス構築」プログラムと三田商店街振興組合が協力して2006年度に港区にオープンした「三田の家」、そしてこの「三田の家」のノウハウを生かして、2008年10月にオープンした「芝の家」の運営をモデルとし、教養研究センターは教育GPの社会連携プロジェクト拠点を横浜市中区に設けました。愛称は「カドベヤ」です。「カドベヤ」の特徴は地元の社会起業家と協働で運営をしていくことと、一般にドヤ街として知られる寿地区に隣接していることです。街をひとつの大きなテキストとして、学生たちがさまざまな人々と交流し、学んでいく拠点として「カドベヤ」は機能していくでしょう。ここでも学生主体の試みが展開されますが、そこから新たなフィールド・ワークや社会連携のモデルを醸造していくことがセンターの目標です。この試みは「ボランティア」や「サービス・ラーニング」とはまったく異なる、慶應発の「関わる人々がともに学びあう場としての社会連携」のモデルを、提供してくれることでしょう。

2009年度に日本の変革を旗印に立ち上がった鳩山民主党政権は1年を待たずに崩壊しました。相次ぐ首相の辞任は、リーダーシップの皆無と無責任さを露呈しています。今私たちが生活をともにしている若い世代は、このような茶番劇を日常のものとして育っています。「生き抜く力」を今の日本のトップがその身を張って示しているとはとても思えません。そのためにも教育現場に寄せられる期待は今まで以上に大きいものとなっています。

そして「生き抜く力」は大学のキャンパスの中だけでは育ちません。一番そのことを理解しているのは実は学生たちです。おそらく彼ら・彼女らが必要としていることは、さまざまな学習の場をどうやってつなげていき、知のネットワークとしていくのか、ということでしょう。その意味で教える側・研究する側もその学生たちの態度と目線に刺激されながら、ともにネットワークの構築に携わっていくべきなのでしょう。その行為は自らの研究と教育の大きなインスピレーションとなることは間違いありません。

ひとりでも多くの教育者・研究者の皆さんと、この思いを共有できることを祈願しつつ、今後ともよろしくご指導・ご鞭撻のほどお願い申し上げる次第です。

目 次

I. はじめに	03
II. 2009 年度活動報告	
1. コーディネート・オフィス	
1) 2009 年度の主な事業	06
2) 広報・発信	10
2. プロジェクト	
1)※ 研究関連プロジェクト	
特定研究	13
基盤研究	17
一般研究	21
2)※ 教育開発関連プロジェクト	
生命の教養学	26
サイエンス・カフェ	27
アカデミック・スキルズ	28
ピア・メンター	29
教員のためのサポート	30
3)※ 交流・連携関連プロジェクト	
日吉行事企画委員会（HAPP）	31
日吉キャンパス公開講座運営委員会	32
「芸術と福祉」国際会議の開催	34
III. 資料編	
1. 教養研究センター運営委員会委員	37
2. 教養研究センターコーディネート・オフィス	38
3. 2009 年度の主な活動記録	39

※ 1) ～ 3) の分類は機能カテゴリーであり、センター内部の組織ではありません。1つのプロジェクトが複数のカテゴリーに属することはありますが、本報告書では便宜上、各プロジェクトを3つのカテゴリーのいずれかにまとめました。

2009 年度の 主な事業

慶應義塾大学教養研究センターのコーディネート・オフィスは、教養研究センターの活動全般についての検討を行う機関である。2007 年度に組織改編を検討した結果、規程の改正が行われ、2008 年度初頭の大学評議会でこの改正案が認められたことにより、新しい教養研究センターの組織が正式に活動を開始している。

(1) コーディネート・オフィスの位置づけとメンバーについて

コーディネート・オフィスは、教養研究センター運営委員会の下におかれ、その役割は、活動の企画・運営・支援および統括、研究資金などの導入、内外諸機関との交流・連携の促進、その他センターが主体的に進めるさまざまな事業の母体としての機能を果たすことにある。同時に各委員会との連携を保ちつつ、センター全体の運営のバランスを図る調整機能も併せ持っている。

2008 年度、教養研究センターの各事業は、2006 年度までの 3 つのセクション、「調査・研究セクション」、「交流・連携セクション」、および「広報・発信セクション」を改組し、それぞれの事業(プロジェクト)の中でこれら 3 つの機能を組織だって果たせるようにした。研究および実践の各事業(プロジェクト)は、その中で研究と交流・連携を図り、その成果を発信するところまでの役割を担う。各事業はグループによって遂行され、メンバーと事業責任者からなる。

事業責任者はコーディネーターとしてコーディネート・オフィスのメンバーとなる。なお、各事業には、所長および副所長のうち、1 名以上が関わるものとする。コーディネート・オフィスは必要に応じて委員会を置き、センターの事業活動の一部を付託するものとする。2009 年度は、日吉行事企画委員会、極東証券寄附講座運営委員会、日吉キャンパス公開講座運営委員会の 3 つの委員会を設置している。

同時に教養研究センター運営委員会は、必要に応じて特別委員会を設置し、教養研究センターに関わる審議事項の一部について、審議を付託することができる。

教養研究センターの活動は組織とコンテンツを含めて、運営委員会、内部および外部の評価を受けるものとする。

コーディネート・オフィスは所長・副所長、事務長、各事業責任者としてのコーディネーターおよび所長

が必要と認めた者をもって構成される。現在はセンター所長、3 名の副所長のほか、センター事務長、各事業の責任者を含む計 18 名で構成されている。

活動の広報・発信・報告は各事業のメンバーによって行われるが、センターの活動報告書、シンポジウムなどの報告書、「ニューズレター」、「センター・リポート」などの編集・発行、センター刊行物の企画・発行、HP の作成と管理を、副所長のうち 1 名が事務組織と協力し合いながら統括する。

(2) 2009 年度の主な事業

組織図であげられているように、プロジェクトは大きく 1. 研究、2. 教育開発、および 3. 交流・連携関係の機能を持つものに分類されるが、これらの機能がオーバーラップするプロジェクトも多数ある。

教養研究センターのさまざまな活動の詳細は、本報告書の各項目で紹介されているのみならず、ホームページ (<http://www.hc.keio.ac.jp/lib-art>) でも随時報告されているので、参照されたい。

1) 教養研究センター各事業(プロジェクト)との連携

教養研究センター主催の各行事や事業は、コーディネート・オフィス会議でその内容を話し合い、コーディネーターの連携のもとに開催されている。研究も含め、各事業の活動については、該当セクションの報告を参照されたい。

2) 新入生歓迎行事・極東証券寄附講座・慶應義塾大学日吉キャンパス公開講座の実施

日吉行事企画委員会 (HAPP)、極東証券寄附講座運営委員会、慶應義塾大学日吉キャンパス公開講座運営委員会の各委員会との連携のもとで、一連の新入生歓迎行事および公募企画行事、極東証券寄附講座「アカデミック・スキルズ」および「生命の教養学」、慶應義塾大学日吉キャンパス公開講座春の講座「記録・記憶と構想の現場」と秋の講座「天からの文(ふみ)を読み解いてみよう——世界天文年に因んで——」の企画および運営に参画した。

3) 一般研究プロジェクトの選定

一般研究(共同研究)とは、センターの目的に沿った内容の共同研究で、外部資金などを獲得していて既に一定の業績をあげている、あるいは、将来、独創的な成果が期待できる、プロジェクトのことであ

る。2009年度は教養研究センターの所員に対して公募され、選定された以下の一般研究プロジェクトが調査・研究を続けた（カッコ内は研究代表者と慶應義塾における所属）。各研究の内容については該当項目を参照のこと。

- ・「学部横断的研究交流による数理科学教育の改善」(初年次) (厚地 淳・経済学部)
- ・「多様な視点からの環境問題の検討と環境教育の試み」(初年次) (小林光宏・法学部)
- ・「プラナリア有性化に伴う GSC/ ニッチ・システムの誘導機構に関する細胞生物学的研究」(初年次) (松本緑・理工学部)
- ・「ソーシャルキャピタルを育む女性研究者支援」(初年次) (浅川順子・商学部)
- ・「可積分系の量子化とミラー対称性」(2年次) (池田薫・経済学部)
- ・「文化財をめぐる教養教育と地域文化振興への実践的研究——東海道の浮世絵と物語を端緒に」(初年次) (津田眞弓・経済学部)
- ・「意味フレームに基づく日英バイリンガル語彙データベースの構築」(3年次) (小原京子・理工学部)

4) 実験授業の開講

研究から導き出された理論を実践し、その成果を試す場として実験授業を、特定研究や基盤研究「身体知プロジェクト」などの各研究事業と連携しながら開講した。それぞれの内容については該当項目を参照のこと。

5) 国際会議の開催

2009年8月17日から19日の3日間、第9回目となる「『芸術と福祉』国際会議」を日吉キャンパスで開催した。テーマは「芸術は社会のために何ができるか・社会は芸術のために何ができるか」である。2009年に開港150年を迎える横浜では、これからの創造力(creativity)がテーマとなっている。慶應義塾大学も同じ横浜市に位置することから、街の創造力に大きく寄与していくことを見据え、学会のホストとして新たな街づくりのあり方を参加者とともに模索していった。会議では11の発表と基調シンポジウム、基調講演各1本のほか、18日、19日に横浜でのフィールドワークを行った。3日間を通して発表と講演のあとは、それぞれ活発なディスカッションが展開された。詳しくは、該当項目を参照のこと。

6) 教養教育関連の招待講演、パネルディスカッションなどへの参加

(パネルディスカッション)

- ・2009年7月25日 外国語教育研究センターシンポジウム「慶應義塾外国語教育への提言(第三回目)——つながる外国語学習、つたわる外国語教育——」にパネリストとして参加。所長の横山千晶が第3部 パネルディスカッション「フレームワーク構築に向けて」のパネリストとして参加した。

外国語教育研究センターは主に言語と異文化交流の分野での教養のあり方を模索している。その共通意識を確認する場として、このシンポジウムは大きな役割を果たしたといえる。パネルディスカッションには学務担当理事の長谷山彰理事ほか、日吉・三田・一貫校・SFCの各代表が出席し、義塾の言語教育に関して会場との活発な意見交換が行われた。

(講演・コメンテーター)

- ・2009年12月9日 授業参観とその後の教員ディスカッションにコメンテーターとして参加
場所：東京都多摩市多摩第二小学校

所長の横山千晶が多摩市が進める「人権を尊重する意識と態度を育てる——個の表現を引き出し、読み取り、はぐくむ『授業のあり方』の研究——」の一環として多摩第二小学校が行った外国語教育の模擬授業を拝見し、コメンテーターを務めた。

- ・2010年2月3日

場所：東京都多摩市多摩第二小学校

平成20・21年度多摩市教育委員会研究奨励校多摩第二小学校「個の表現を引き出し、読み取り、はぐくむ『授業のあり方』の研究——人権を尊重する意識と態度を育てる——」研究発表会に参加。

所長の横山千晶が授業参観ののち、特別講演「表現の大切さとコミュニケーション」を行った。

以上のふたつはいずれも東京都多摩市多摩第二小学校で行われたものだが、高等教育は中・高のみならず初等教育とも密な連携をとっていくべきものである、との考えから、教養研究センターは、義塾の一貫校のみならず外部からの働きかけにも積極的に応じ、初等教育に関わる方々との意見交換やディスカッションに参加する方向をとっている。

7) Hiyoshi Research Portfolio 2009 への参加

2009年2月8日から2010年3月31日の期間にウェ

ブ上で公開された、「Hiyoshi Research Portfolio (HRP) 2009 ——『知』をめぐる社会との交流・協働の場——」に研究・活動成果を発表する形式で参加した。今回ウェブ上で紹介した研究および活動は、①文部科学省「大学教育・学生支援推進事業」大学教育推進プログラム【テーマA】「身体知教育を通して行う教養言語力育成」（代表者 武藤浩史〔教養研究センター副所長・法学部〕）、②「学び場プロジェクト」（代表者 種村和史〔教養研究センター副所長・商学部〕）、③2009年度「庄内セミナー」（代表者 羽田功〔教養研究センターコーディネーター・経済学部〕）、④教養研究センター設置科目「極東証券寄附講座」（代表者 鈴木晃仁〔教養研究センターコーディネーター・経済学部〕）、⑤身体知の実験授業（代表者 横山千晶〔教養研究センター所長・法学部〕）の5つである。

8) 文部科学省の「大学教育・学生支援推進事業」大学教育推進プログラムに採択

教養研究センターの事業「身体知教育を通して行う教養言語力育成」が、文部科学省の「大学教育・学生支援推進事業」大学教育推進プログラム【テーマA】（教育GP）に採択され、2009年度より3年間資金援助（予定）を受けることとなった。採択事業は2005年度より継続して研究・実践してきた「身体知プロジェクト」を基盤に、各所員の活動を組み入れる形で構成したものである。事業内容に関しては、本報告書の該当箇所を参照のこと。

9) 極東証券寄附講座、創立150年記念事業「未来先導基金」採択事業

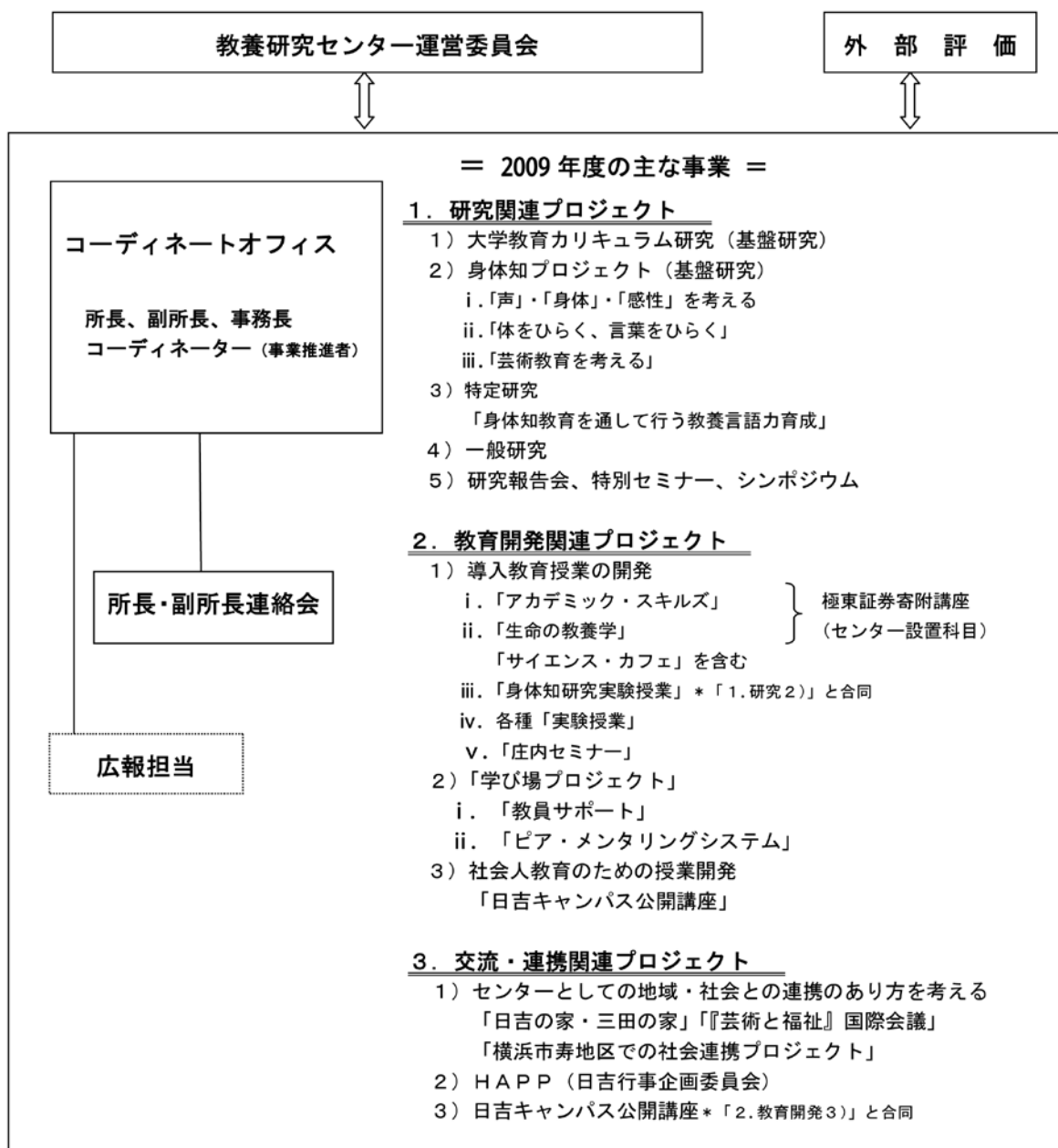
教養研究センターの活動は経常費以外に極東証券株式会社などからの寄付による活動、および創立150年記念事業「未来先導基金」、部門内調整費など塾内外の資金援助を受けて行っている。これらの資金援助を受けることによって2009年度も活発な活動を展開することができた。

10) コーディネート・オフィス会議の開催

2009年度は原則として1か月に1回の割合で定例会議を開催した。そのほか、必要に応じて臨時会議やメーリング・リストによるメール会議と意見交換を適宜行った。

（横山千晶）

大学教養研究センター組織構成と主な事業（2009 年度）



コーディネート・オフィスは、運営委員会の付託を受けて教養研究センターの日常的な活動を執行する機関である。所長・副所長・事務スタッフに加え、教養研究センターの極めて多彩なプログラムを統括する代表や中心メンバー、学部や関連研究所からのメンバーが加わっている。教職一体での運営というのが教養研究センター設立からの理念であるが、これを実行しているのがコーディネート・オフィスである。

教養研究センターは、2009年度に文部科学省の「大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラム」に慶應義塾大学「身体知教育を通して行う教養言語力育成」事業として採択された。この事業(以下、教育GPと省略)に伴う多様なプロジェクトが2009年度後半から進行している。センターのホームページに加え、教育GPの活動の広報と成果の発信を以下のホームページでも逐次、センターの活動と連携させながら行っている。教養研究センターのホームページ (<http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/> 2008年度4月開設) 教育GPの活動の広報と成果を発信するホームページ (<http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/gp/>)

1. 刊行物の紹介

2009年度の刊行物は以下の通りである。

- Newsletter (ニューズレター) 14号 2009年7月15日発行
- Newsletter (ニューズレター) 15号 2010年1月15日発行
- 2008年度活動報告書
- CLAアーカイブズ19 教員サポート6 アカデミック・スキルズ——少人数セミナーの指導法——
- CLAアーカイブズ20 教員サポート7 “学生の悩みについての悩み”を解消するために——教員と学生相談室との連携について——
- CLAアーカイブズ21 図書館に展開する半学半教の場作り——「学生の学習環境を整える」プロジェクト2008・2009活動報告書——
- 2009年度「庄内セミナー」報告書
- 慶應義塾大学教養研究センターシンポジウム9『慶應義塾大学の教育カリキュラム研究②——4年間を見越した教養教育の研究——』
- 教養研究センター選書 3冊(詳細は別記)

2. Newsletter (ニューズレター)の刊行

Newsletter (ニューズレター) は年2回、7月と1月に刊行されている。14号では極東証券寄付講座「アカデミック・スキルズ」を特集した。教養研究センターが提供する科目として定評のある「アカデミック・スキルズ」が新しい学びの場の創出に向けて展開する活動を紹介した。履修学生のアンケートと寄稿、メディアセンターにおける「ピアメンター」(アカデミック・スキルズ修了学生による学生のた

めの学習相談)の取り組みを取り上げた。15号では教育GPが採択されたことに伴い、センターの特定研究として設定された「身体知教育を通して行う教養言語力育成—慶應義塾『語力』開発のモデル提示と実施」と題する教育プログラムを特集した。

3. CLAアーカイブの刊行

近年、内外からアーカイブの提供依頼の申し込みがあり、教養研究センターのアーカイブが単なる内部資料としての価値にとどまらない広がりをみせ始めている。今回のアーカイブも教育上大いに参考にしたいと思う。ことに、アーカイブ21は「報告書」ではあるが、「半学半教」の場作りと標榜する通り、図書館で展開する教員と学生、そして学生から学生へという学びの連携が行われている事例記録である。資料編には「テーマ選び」「プレゼンテーションの基礎」「レポートの書き方」への助言など、アカデミック・スキルズのエッセンスが豊富に盛り込まれている(総頁数86ページという総力取材である)。今後とも教育にきわめて有用なアーカイブとして役立つことは間違いないであろう。

4. センターの選書の刊行

昨年度は応募者なしという状況であったが、今年度は多くの応募があり、その中から3点が選書として採択され刊行に至った。今回の特徴としては、日吉キャンパスで開催された多彩な企画を研究としてまとめた選書が2作含まれている点であろう。本選書シリーズの眼目のひとつは、図像や写真などの資料が充実していること、かつまた文献目録を完備させることだが、今回の選書も充実したラインナップとなった。講義や少人数セミナーの副読本にも今後利用されることが期待される。(慶應義塾大学出版会刊、700円【税別】)

- 萩原真一著『イエイツ——自己生成する詩人』
- 新島進編『ジュール・ヴェルヌが描いた横浜——「八十日間世界一周」の世界』
- 佐藤元状・坂倉杏介編『メディア・リテラシー入門——視覚表現のためのレッスン』

5. その他の刊行物

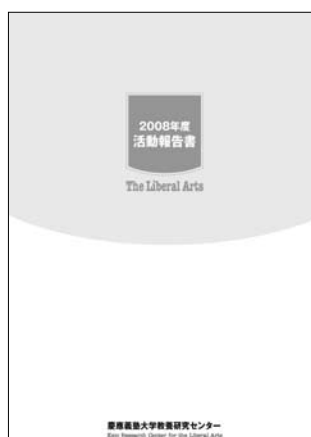
庄内セミナーは「心と体と頭と」を存分に使い学びの場を広げることを全体のテーマとしている。2009年度「庄内セミナー」報告書では2009年度のテーマ

「激動の時代を生き抜く——松ヶ岡開墾場に学ぶ生命のつながり」に基づき、学生がセミナーでの講義や体験を通じて感得したテーマをいかに発展させ最終発表会に至ったか、その過程が豊富な写真とともに記録されている。参加教員による報告のみならず、学生自身が調査結果をさらに報告書としてまとめたもので、学生にとって大きな成果物として利用できるであろう。学生にも配布された、慶應義塾大学教

養研究センターシンポジウム9『慶應義塾大学の教育カリキュラム研究②——4年間を見越した教養教育の研究——』は、特定研究のまとめとして開催されたシンポジウムの報告である。これまでのカリキュラム研究は、昨年度報告書としてまとめられている。
(不破有理)

2009 年度教養研究センター

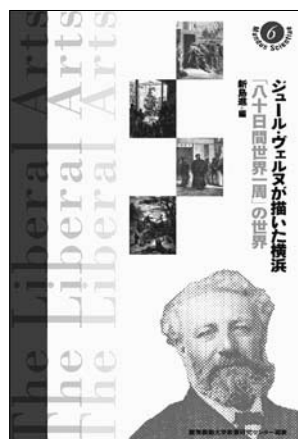
刊行物一覧



2008 年度活動報告書
(2009.8.20 発行)



教養研究センター選書 5
『イエイツー自己生成する詩人』
(2010.3.31 発行)



教養研究センター選書 6
『ジュール・ヴェルヌが描いた横浜
ー「八十日間世界一周」の世界』
(2010.3.31 発行)



教養研究センター選書 7
『メディア・リテラシー入門
ー視覚表現のためのレッスン』
(2010.3.31 発行)



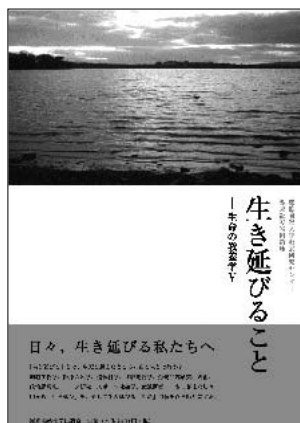
教養研究センターシンポジウム9
慶應義塾大学の教育カリキュラム研究②
(2010.3.16 発行)



2009 年度アカデミック・スキルズ
学生論文集
(2010.3.31 発行)



2009 年度庄内セミナー報告書
(2010.3.20 発行)



2008 年度極東証券寄附講座
「生命の教養学」講義集
(2009.12.10 発行)



Newsletter14 号
(2009.7.15 発行)



Newsletter15 号
(2010.1.15 発行)



CLA アーカイブズ 19
(2010.3.31 発行)



CLA アーカイブズ 20
(2010.3.31 発行)



CLA アーカイブズ 21
(2010.3.31 発行)

特定研究

全体総括

文科省大学教育推進プログラム【テーマ A】(教育 GP) 「身体知教育を通して行う教養言語力育成」

本センター特定研究として、2008 年度より「身体知教育を通して行う教養言語力育成」プログラムが始まった。これは日本の大学教育では座学の授業と比して参加・体験型教育が少ないという認識の下、後者の充実をはかることにより、それを中級レベルの言語力教育と繋げようとするもので、創造力と協働力を備えたリーダーシップ教育を兼ねる。

始動年であった 2008 年の準備を経て、本研究は 2009 年度より始まる文科省大学教育推進プログラム【テーマ A】(教育 GP)に申請し、採択された。そして、同年 10 月よりその活動が始まった。全体活動の他に、5 つに分かれたセクション——I「アート」、II「フィールド・アクティビティ」、III「コミュニティ」、IV「コミュニケーション」、V「発信・評価・システムデザイン」——毎の活動やセクション間連携・横断的活動が、活発に展開された。

全体活動としては、統合企画ボードが始動し、2010 年 3 月に全体シンポジウム「身体知と言語」が開かれ、又、2 月に本プログラムのウェブサイト (<http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/gp/>) が構築された。セクション毎の活動としては、I「アート」では、感動体験ワークショップ「言語と身体知」で 4 回の WS を行った他、狂言と言語力 WS などを実施し、II「フィールド・アクティビティ」では、フィールドワーク実践授業や「世界を知る・社会を知る」映画上映を実施した他、キックオフセミナー 1「フィールドワークの現在」を開催し、III「コミュニティ」では、キャンパス外拠点構築(横浜市寿地区)を行った他、講演シリーズ「コミュニティを創る・コミュニティを考える」、キックオフセミナー 2「コミュニティ・アートと言語力」、歌と踊りのコミュニティ構築 WS「身体知とダンス」を開催した。三田地区ではキャンパス外拠点「芝の家」を中心に、コミュニティ菜園プロジェクトを試み、また、図書館でピア・メンター相談システム「学び場プロジェクト」を始動させ、学内コミュニティの構築に努めた。IV「コミュニケーション」は、主として I「アート」と協働して、実験授業「体をひらく、言葉をひらく」や前述「言語と身体知」シリーズに参加する形で、WS を行った。V「発信・評価・システムデザイン」では、ニュー

ズレターを作る実験授業「編集スキルズ」を通して学生の言語発信力を高めるとともに、身体・言語・文化デザイン研究会を始動させ、評価システムの構築を開始した。以下、主たる活動内容を列挙する。

1. 10 月～11 月 庄内セミナー「庄内に学ぶ^{いのち}生命」参加者最終報告会(11 月 14 日)と展示会(10 月 10 日)実施(担当:羽田功、不破有理、横山千晶)
2. 10 月～1 月 社会学のフィールドワーク 1 日吉エイジ(10 月 10 日)にて「感情 T シャツ WS」開催、2 アートミーツケア学会(12 月 5 日)にてオープントーク「障害とか性とか」開催、3 「身体障害者のセクシュアリティコンテスト」(12 月 5 日、1 月 10 日)開催(担当:岡原正幸)
3. 10 月～1 月末 フィールドワークの実験授業 1 「メディア・デザインのためのフィールドワーク? 共感と実感の言葉を身につける」(担当:武市政直)
4. 10 月～1 月末 フィールドワークの実験授業 2 「地域との対話」の実施(担当:牛島利明、柏崎千佳子)
5. 10 月～1 月中旬 学び場プロジェクト「ピア・メンターによる図書館での学習相談アワー」開始(担当:種村和史、横山千晶、不破有理、篠原俊吾)
6. 10 月～2 月末 ホームページの構築(担当:不破有理、笠井裕之、手塚千鶴子、横山千晶、武藤浩史)
7. 10 月～3 月末 「統合企画ボード」の開催(担当:不破有理、笠井裕之、手塚千鶴子、横山千晶、武藤浩史)
8. 10 月～3 月 コミュニティ菜園プロジェクト実施(担当:坂倉杏介)
9. 10 月下旬～1 月下旬 身体知の実験授業「体をひらく・言葉をひらく」の実施(担当:手塚千鶴子、横山千晶、武藤浩史)

10. 11月～12月 「世界を知る・社会を知る」映画上映会 1「働きながら、世界のために?『エマニュエルの贈り物』」(11月2日)、2「子供の労働問題に目を向ける?『アリ地獄のような街』」(11月30日)、3「ショートフィルム+ティーチイン」(12月14日)、4「『フェンス』上映と藤原敏史監督に訊く」(12月22日)の実施(担当: 1 牛島利明、2～4 佐藤元状)
11. 11月～3月 寿地区拠点作り「カドベヤ」の構築、および寿地域の社会的企業やNGO団体との連携(担当: 横山千晶、武藤浩史)
12. 11月～3月 編集スキルズ「ニューズレターを作る」実験授業(担当: 笠井裕之、大出敦、吉田恭子)
13. 12月～3月 「コミュニティを創る・コミュニティを考える」プロジェクト——講演上田假奈代「From 釜ヶ崎 こえとことばとところをつなぐ試みについて」、講演山中修「From 寿 さなぎ達の活動と寿町」など(担当: 横山千晶、武藤浩史)
14. 12月末～3月末 「身体・言語・文化デザイン研究会」の開催(担当: 前野隆司、笠井裕之、不破有理、横山千晶、手塚千鶴子、武山政直、長田進、武藤浩史)
15. 12月末～3月末 「教育評価創造委員会」の開催(担当: 笠井裕之、手塚千鶴子、不破有理、横山千晶、長田進、武藤浩史)
16. 1月 教員サポートプログラム「“学生の悩みについての悩み”を解消するために」(1月14日)(担当: 種村和史、横山千晶)
17. 1月29日「狂言と言語力」ワークショップ(講師: 大藏基誠)の開催(担当: 徳永聡子)
18. 2月～3月 「感動体験ワークショップ」の実施(計4回「シェイクスピアを遊ぶ」、「ひとり語り」、「プロセスワーク」、「ことば→からだ、からだ→ことば」)(担当: 横山千晶、武藤浩史、木檜朱実)
19. 3月3日 全体シンポジウム「身体知教育と言語力育成」(パネリスト: 茂木健一郎、井上逸兵、黒沢美香、武藤浩史)の開催(担当: 武藤浩史)
20. 3月 歌と踊りのコミュニティ構築ワークショップ「身体知とダンス」(3月6日、21日)の開催(担当: 横山千晶、武藤浩史、黒沢美香、木檜朱実)
21. 3月 フィールドワーク実践「自由研究セミナー八丈島を知る」実施(担当: 長田進)
22. 3月 「キックオフ・セミナー」シリーズの開催 1「フィールドワークの現在? 世界をキャンパスにする」(3月2日、パネリスト: 牛島利明、岡原正幸、長田進、熊倉敬聡、坂倉杏介、武山政直)、2「コミュニティアートと言語力育成」(3月20日、パネリスト: 大谷燮、小島希里、即興カラメル団)(担当: 横山千晶、武藤浩史)

(武藤浩史)

庄内セミナー

昨年度の鶴岡セミナーに続いて今年度はフィールドを庄内に広げ、教養研究センター主催・東北公益文科大学共催で庄内セミナーを開催した（参加者は慶應13名、公益大6名）。セミナーは8月31日から9月3日までの庄内での合宿セミナーと11月14日日吉での報告会から構成されている。「松ヶ岡に学ぶ生命のつながり」をテーマに、明治維新期の元庄内藩士による松ヶ岡開墾とこの重労働を支えた精神的背景というべき藩校・致道館で講じられた徂徠学について体験的に学んだ。松ヶ岡については酒井忠久氏（致道博物館館長）、徂徠学については松村宏氏（慶應義塾大学名誉教授）に講義していただき、加えて一般公開企画として東山昭子氏（鶴岡市総合研究所顧問）による庄内の文学、須藤良弘氏（元酒田市史編纂専門委員）による酒田港の歴史に関する講演も拝聴した。さらに羽黒山登山、羽黒山伏による八朔祭の見学、松ヶ岡開墾場理事長・山田鉄哉氏のご指導でだだ茶豆、サツマイモの収穫作業とこれを使った夕食作り、鶴岡市内でのフィールドワークなどを行い、合宿最終日には4グループに分かれた学生たちの中間報告が行なわれた。その後、グループごとに連絡を取り合いながら、最終報告を目指したグループワークを継続し、11月14日の報告会では各グループが現代的な観点から見た羽黒修験、地方活性化の庄内モデル（スタンダード）、致道館教育の意義についてプレゼンテーションを行なった。酒井氏、松村氏のほか松ヶ岡開墾場の管理運営をしておられる酒井忠順氏（松岡物産社長）、東北公益文科大学大学院研究科長の大歳恒彦氏などから厳しくも好意的なコメントをいただき、報告会は無事終了した。これは『2009年度「庄内セミナー」報告書』としてまとめられている（2010年3月発行）。

なお、今回は、プレ企画として8月1日に映画『おくりびと』の上映（一般公開）と庄内映画村社長・宇生雅明氏による庄内の魅力を語る講演会を、また、セミナー関連企画として、山形県庄内観光コンベンション協会、大学生協（日吉）、日吉メディアセンターのご協力で、生協総代会における庄内セミナーのブース出展、ヒヨシエイジでの庄内物産展、鶴岡出身の慶應義塾初代図書館長・田中一貞を取り上げた図書館展示企画『慶應義塾と庄内ー「ハート」の教

育者・田中一貞』、生協店舗における庄内フェア（庄内ランチ、庄内物産の販売、庄内関連書籍の展示・販売）を開催、好評を博した。

鶴岡市をはじめとする関係者の皆さん、本当にありがとうございました。

（付記：2010年度は松尾芭蕉と『おくの細道』を取り上げて、芭蕉の見た庄内路の「生命」を検証するセミナーを開催する。庄内セミナー URL は以下の通り：<http://keio-up.net/shseminar/>）

（羽田 功）

三田の家

「三田の家」プロジェクトは、慶應義塾大学の教員と(元)学生有志などが三田商店街振興組合と共同で「家」を運営し、三田の地域社会に新たな文化・交流の萌芽をもたらすべく2006年度より活動してきた。2009年度の教員メンバーは以下の通りである。岡原正幸(文学部)、長田進(経済学部)、熊倉敬聡(理工学部)、坂倉杏介(教養研究センター)、武山政直(経済学部)、手塚千鶴子(日本語・日本文化教育センター)。本プロジェクトは、長期的には、港区から「三田の家有限責任事業組合」への受託事業である「芝の家」プロジェクトとも連携しつつ、大学と地域の協働による21世紀的学生街の創出を目指している。

2009年度の活動としては、主に以下のことを行なった。

1) オープンな授業、実験的ワークショップの開催

文学部岡原研究会(毎週金曜)と文学部授業「芸術の現在」(毎週木曜：熊倉担当)は、その活動を三田の家で一般公開の形で行なった。また、これらの授業あるいは他のプロジェクトメンバーが、多様な実験的ワークショップを開催し、通常のキャンパス内では達成不可能な数々の教育的また社会的成果を上げた。

2) 社交力養成のための横断的交流プログラム

三田の家では、通常のキャンパスで受ける様々な制度的制約を超えた学生教職員間の交流、あるいは塾外の多様な社会的カテゴリーの人々との交流が日々実現される。例えば、毎週月曜日行なわれる「小さな国際交流」プログラム(手塚担当)では、外国人留学生と日本人学生が様々なワークショップや講演会、あるいは料理などの日常的活動を通して、小規模ながらも実質的な意味のある多文化交流を行なった。

3) 三田地域の活性化に関する活動

三田の家の共同運営者である三田商店街振興組合の活動に積極的に協力し、三田地域の活性化に貢献した。具体的には、恒例のサマーカーニバルや年末大売り出しへの協力などを行なった。

4) アートミーツケア学会への協力

アートミーツケア学会2009年度総会大会が2009年12月5日・6日三田キャンパスにて開催されたが、その企画運営に実質的な協力を行なった。また分科会の一つが三田の家で開催された。

(三田の家 URL: <http://mita.inter-c.org/>)

(熊倉敬聡)

基盤研究 (1) カリキュラム研究

慶應義塾大学の教育カリキュラム研究

1) シンポジウム「慶應義塾大学の教育カリキュラム研究② —— 4年間を見越した教養教育の研究 ——」の実施

2007年度からの研究課題「慶應義塾大学のカリキュラム ②—— 4年間を見越した教養教育に関するカリキュラム研究」が2008年度に完結し、同タイトルの報告書を発行したが、2009年度はその研究成果発表を兼ねたシンポジウムを開催した。このシンポジウムは、2009年11月9日18:15～20:30に慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎、シンポジウムスペースにて行った。

前年までの研究を担当したメンバーの代表が、まず報告を行った。報告者は、座長の伊藤行雄（研究会座長・経済学部）、佐藤 望（商学部）、大場 茂（文学部）、村山光義（体育研究所）、坂本 光（文学部）であった。

ディスカッサントとして、長谷山彰常任理事および羽田功（経済学部）が加わり、現在の大学カリキュラムの問題点や、2009年に新しく大学評議会のもとに設置された「学部共通カリキュラム委員会」および「日吉カリキュラム検討委員会」の意義について話し合うとともに、これまで教養研究センターで継続してきた研究が、今後のカリキュラム構築の基礎的な資料として役立つであろうことを確認した。

2) 今後の教養研究センターのカリキュラム研究に関する検討

教養研究センターでは、2003年度より継続して「基盤研究」においてカリキュラムのあり方に関する研究を行ってきた。これまでの数々の報告書やシンポジウムを通じて、その成果を公表してきた。その成果もあり、「学部共通カリキュラム委員会」および「日吉カリキュラム検討委員会」が設置されたわけであるが、2009年度はその委員会の動向も見極める意味で、一旦これまで行ってきたような集中的な研究活動を休止し、前年度の成果発表のみにとどめた。

しかしながら、教養研究センターとして、カリキュラム研究については、今後さらに検討すべきことであるので、次年度に向けての方針作りを行うための会合が、これまでの基盤研究（カリキュラム研究）の幹事を担当したメンバーで集まり、意見を交わした（2010年2月1日）。

その結果、時代にふさわしい教養教育カリキュラムの研究について、これまでに行った提言の再検証や、問題点の検討、成績評価の考え方の普及、半期制問題、学部横断プログラムの整備などについて、今後も継続して研究を続けていくべきであろうという意見が多数を占めた。特に、学生本位のカリキュラムとは何か、という視点に立ち、カリキュラム問題を追求しつつ、日吉共通の横断的副専攻制度への道筋を検討すること。教養研究センターとしてのカリキュラムの構築・構想の独自性を維持しながら、「日吉カリキュラム委員会」との連携をはかっていくことなどが検討された。その意味で今後の課題を深化できる研究会は来年度以降も、積極的に維持していくべきとの結論に至った。

（伊藤行雄・佐藤 望）

基盤研究 (2)

「身体知プロジェクト」
(総括)

2005 年度に発足した「身体知プロジェクト」は研究会と実験授業による実践活動の双方から研究を進めている。2005 年度より月例研究会を発足し、「身体知」をめぐる理論について研究を進めると同時に、音楽・体育・朗読など慶應義塾で展開されているさまざまな身体知教育に携わる教職員が意見交換を行ない、塾内外の試みについて調査した。またそれらの成果を実践で試すために 2006 年度から秋の実験授業「体をひらく・心をひらく」シリーズを開講。それに加え 2007 年度より夏季集中実験授業の「新しい文学教育」を開講し、現在に至っている。

これらの研究と実践の成果を基にして、教養研究センターは 2009 年度、「身体知教育を通して行う教養言語力育成」のテーマで文部科学省 大学教育・学生支援推進事業 大学教育推進プログラム (教育 GP) に申請し、採択された。よって、身体知プロジェクトの活動の多くは、今後 3 年間教育 GP の一環として実施されることになる。また、慶應義塾内部での身体知教育カリキュラムの一部は、2007 年度より 3 年間に渡って未来先導基金採択事業「『声』を考える」プロジェクトとして展開されている。いずれの活動も体験を通じた教育カリキュラムの実践において大きな成果を挙げた。

以下、各活動について紹介する。

1. 「身体知教育を通して行う教養言語力育成」実験授業「体をひらく・言葉をひらく わたしたちの物語を紡ごう～身体アート表現を介しての言葉磨きと協働力養成」

2006 年度より開講されている「体をひらく・心をひらく」シリーズの一環として今年は、「体をひらく・言葉をひらく」を開講した。2009 年度は、文部科学省 大学教育・学生支援推進事業 大学教育推進プログラム「身体知教育を通して行う教養言語力育成」のプロジェクトのひとつとして実施された。

1) スケジュールは以下のとおり。

10 月 28 日 ワークショップ 1

対自的コミュニケーション力をみがく (講師：手塚千鶴子、菊住彰)

11 月 4 日 ワークショップ 2

対他的コミュニケーション力をみがく (講師：手塚千鶴子、菊住彰)

11 月 11 日 ワークショップ 3

知っている物語を自分風書き換え・作り変えてみよう

11 月 25 日 グループワークショップ 1

書き換え・作り変えた物語から大きな物語を作る

12 月 2 日 グループワークショップ 2

アーティストと一緒に創作してみよう その 1 (講師：菱山裕子)

12 月 9 日 グループワークショップ 3

アーティストと一緒に創作してみよう (講師：黒沢美香、菱山裕子)

12 月 22 日 創作発表と感想交換会

2) 授業担当者

コーディネーター：手塚千鶴子 (日本語・日本文化教育センター)、武藤浩史 (法学部)、横山千晶 (法学部)

講師：菊住彰 (学生相談室カウンセラー)、菱山裕子 (国際センター非常勤講師・アーティスト)、黒沢美香 (ダンサー)

協力者：高山緑 (理工学部)、熊倉敬聡 (理工学部)

3) 授業内容と趣旨

今回の授業は自分の内面と向き合う「対自」のワークショップのあと、他人とのコミュニケーション力を身につける「対他」ワークショップを経て、このふたつのワークショップを言語力育成へとつなぐことを目標とした。その際のツールとしたのが「おとぎ話」である。まずは誰でも知っている「おとぎ話」を各自書き換え、仲間たちとシェア、続いてグループとなってそれぞれの書き換えからもっと大きなひとつの物語を作っていくことを目指した。作り上げたものは、アーティストの協力によって言語のみならずさまざまなアート表現を交えてひとつの作品へと作り上げていった。自分と他人、言葉と言葉ではあわせえないもの、体と言葉。2 項対立に陥りがちなこれらふたつを協働でつないでいく作業を、このクラスでは目指した。各授業の最後には必ず振り返りを行い、ポートフォリオを書いてもらうようにした。最終日には講師のみならず他の教員たちも招いて発表会を行ったほか、最終授業から 1 ヶ月たった 2010 年 1 月 19 日には全体振り返りの会を開催し、授業評価を行った。

なお、この授業の報告書は CLA アーカイブの一冊として 2010 年度に公刊される。

2. 創立 150 年記念事業「未来先導基金」『「声」・「身体」・「感性」を考える——高等教育における実践と新しい教育モデルの提示』

本活動は 2007 年度および 2008 年度の未来先導基金の公募に採択された『「声」を考える』プロジェクトを引き継いだものである。2009 年度は、3 年目を迎え、最終成果として新たな教育モデルを提示することを目標とした。具体的には 1) 文学、2) 音楽、3) ドラマの 3 つのプログラムを展開し、カリキュラム・モデルの構築を行った。以下、それぞれのプログラムについて説明する。

1) 声と身体と歴史文化の接点 その 1 ——大学における新しい文学教育③<J. M. クッツェーの謝肉祭>

・スケジュール

未来先導基金を受けての夏季集中実験授業（「新しい文学教育」）は 2009 年度で 3 年目を迎えるが、今回は南アフリカ出身のノーベル賞作家 J.M. クッツェーの『恥辱』と『動物のいのち』をテキストとして選び、<動物とは何か？>という根源的な問題を正面から取り扱った。スケジュールは以下の通りである。

- 8 月 10 日 第 1 時限は「オリエンテーション」、
第 2 時限は「詩のワークショップ」
11 日 第 1 時限は「哲学のワークショップ」、
第 2 時限は「パントマイム・ワークショップ」
12 日 「演劇ワークショップ」
13 日 「狂言ワークショップ」
14 日 「ダンス・ワークショップ」
15 日 「謝肉祭」(創作発表会)

・授業担当者

コーディネーター: 佐藤元状(法学部)、横山千晶(法学部)、武藤浩史(法学部)、荒金直人(理工学部)、吉田恭子(文学部)、すがぼん(パントマイム・アーティスト)、大藏基誠(能楽師)、松井周(劇作家・演出家)、黒沢美香(ダンサー)

・授業内容と趣旨

人数クラスによる短期間の集中的な体験授業（夏季休暇中の 8 月 10 日～15 日）を通して、文学作品の歴史的な意義を精読によって理論的に把握すると同時に、それを創作・パフォーマンスを通じて身体化することによって、文学作品のアクチュアリティ

を個々の身体に刻み込み、固有の芸術的表現にまで高めることの可能性を探索した。身体的なパフォーマンスを通じて、学問的な研究成果の紹介としての文学教育から一步踏み出し、文学的な想像力を鍛える新しい教育的なモデルの構築を目指すことがその趣旨である。成果として、通常の授業では困難な思考と身体のコラボレーションを実践する有意義な機会となった。

2) 声と身体と歴史文化の接点 その 2 ——演奏家とのコラボレーションによる授業実践「楽器の声に託された生と死」

・スケジュール

演奏家による実演を交えた実験授業シリーズのスケジュールは次の通りである。

10 月 17 日 第 1 回「バロック以前」

教会政治の歴史的な文脈と併せ多声音楽や和声感覚について学んだ。

10 月 31 日 第 2 回「弦楽四重奏の誕生と発展」

クラシック音楽の中でも特にハイブラウなジャンルとされる弦楽四重奏の特殊性、ならびに古典派の形式の確立と崩壊について学んだ。

11 月 7 日 第 3 回 演奏会企画制作の専門家に「コンサート制作のノウハウ」を学ぶ

11 月 28 日 第 4 回「文学的モーツァルト」

小林秀雄『モーツァルト』の精読とともに身体知ワークショップも体験した。

12 月 7 日 第 5 回「ポスト・ベートーヴェン」

死の音楽表現を講じた上でシリーズの円環を閉じ、演奏会運営の実技演習にも時間を割いた。

以上の実験授業のいわば成果発表として、日吉行事企画委員会（HAPP）の補助を得て本年 1 月 15 日に、受講者の運営による「クアルテット・エクセルシオ特別コンサート」を協生館藤原洋記念ホールにおいて開催。多数の地域住民を含む 270 余名の聴衆に大好評を博した。

・授業担当者

クアルテット・エクセルシオ（弦楽四重奏団＝西野ゆか・山田百子・吉田有紀子・大友肇）、新谷崇(法学部)、高橋宣也(文学部)、佐藤望(商学部)、武藤浩史(法学部)、横山千晶(法学部)、櫻井あゆみ(NPO 法人トリトン・アーツ・ネットワーク)、

福島欣尚(音響エンジニア)、渡辺俊哉(作曲家・国立音楽大学)

・授業内容と趣旨

音楽を通じて歴史・文化の中の人間の生を追体験する教育メソッドの開発を最終目標とし、芸術に秘められた人間の生を、文学・歴史・思想等、多角的視点から理論的に見つめ直すとともに、演奏家とのコラボレーションにより音として発せられる過程を体感するという実験授業を企画した。企画段階から斯界屈指の精鋭クアルテット・エクセルシオの参画を仰げたことにより、きわめて高度な芸術的水準が確保された。

本企画は音楽業界のいわゆる「口コミ」でも評判となり、ホール関係者や音楽事務所社員、音大生の聴講申し込みが相次ぐとともに、趣旨に賛同した若手現代作曲家や音響エンジニアの協力も得られた。

3) 「声」・「身体」・「感性」から語学を考える——

ドラマを通した語学教育

・スケジュール

2009年度外国語教育研究センター設置 英語「ドラマクラス」(全学部共通科目 法学部 横山千晶担当)をその実践の場として、新たな語学教育を模索する地場とした。この授業はすべてワークショップの形式で行われるものであり、クラス内でのグループワークそのものがすでにコミュニケーション構築の場である。また、夏合宿を行うことで英語の戯曲を徹底的に読みこなし、ディスカッションを行うことで学生の読解力を鍛えた。本年度取り上げた作品はニール・サイモン作『映画に出たい!』である。

クラスの成果は2009年12月18日に英語のドラマ公演として日吉キャンパス来往舎にて一般公開した。

・授業担当者 横山千晶(法学部)

・授業内容と趣旨

文字によるテキストを実際に声と身体を使ってのディクショ、あるいはコミュニケーションに置き換えることは、頭で理解した内容を身体で表現するという一連の作業である。コミュニケーションとは単なる「言葉」ではない全身活動である以上、身体は語学のクラスで常に意識されるべき存在であろう。

この実践では、書かれたものを、身体を使いつつ理解し、理解したことを再び自分の身体を使って他人に伝え、その過程で獲得し共有したことを再びログス化してみるという一連の訓練を、新たな知の領域として学生たちに周知させる試みとして、「ドラマ」を使った。使われるシナリオはすでに評価を得ている作品を選び(2009年度はニール・サイモン作『映画に出たい!』)、夏合宿で十分に感性と想像力を用いながら読み解くことで、文学作品に対する学生の深い理解にもつなげていった。

成果発表の場であるドラマ公演では、観客と共通の空間とドラマという架空の場を通して、「演ずるもの」と「鑑賞するもの」という新たな形のコミュニケーションを図ることで、自分が理解したことを同じく観客に理解してもらうという課題を学生はこなすことになる。しかもテキストは英語である限り、演ずる側は声と身体を駆使して、このコミュニケーションを行うことが必要となる。結果として、外国語のみならず広い意味での声と身体を使ったプレゼンテーション能力を学生一人ひとりが十分に発揮することとなった。

以上の3つのプログラムに関しては、すべて参加者による授業評価を行い、非常に高い評価を得た。また2010年5月には未来先導公募プログラムのポスターセッションで成果報告を行うと同時に5月14日に未来先導公募プログラムの報告会にて成果を口頭で発表した。

(横山千晶)

一般研究

学部横断的研究交流による数理科学教育の改善

研究代表者 厚地 淳（経済学部）

Ⅰ. 研究概要

慶應義塾の異なる学部に点在する数理研究者の研究交流の環境を整え連携を図り、それを本学の数理科学教育の改善と充実に還元することを目的とする。主に、研究者間の研究交流のためのセミナーや数理科学教育の改善のための教育プログラムの検討を行っている。保険業界は数理系・経済学系の学生の重要な進路となっており、保険・保険数理および関連分野に対する啓発を目的とする OLIS-慶應義塾大学保険フォーラムが開催（2009 年 7 月と 11 月）されたが、これは本プロジェクトでの議論を基にしたもので昨年度の成果の一つとして挙げられる。また、これに関連する議論が元になり、2010 年度より OLIS 寄附講座による理工学研究科—経済学部の連携的講義が開講されることになった。今後もこの方面の充実を検討していきたい。また、昨年度は、経済学部と理工学部の連携が中心であったが、これをより多くの学部間に広げたいと考えている。

Ⅱ. 研究成果

前述したように当プロジェクトの議論は、以下の保険フォーラムの開催、理工学研究科—経済学部の連携講義の開講の実現に寄与した。

- OLIS—慶應義塾大学保険フォーラム：本学の学生（学部は制限しない）を対象にしたもので、以下のような話題を中心に大学および実業界からの講師による講演とパネルディスカッションがあった。

第 1 回 2009 年 7 月 4 日 10:30～16:00（日吉）「生命保険とは何か？」、第 2 回 2009 年 11 月 7 日 10:30～16:30（矢上）「キャリアパスとしての保険・信託」

主な講演者：辻 芳彦（日本アクチュアリー会事務局長）、吉野直行（慶應義塾大学経済学部教授）、於久田太郎（ソニー生命保険株式会社代表取締役社長）、長井英生（大阪大学 金融・保険教育研究センター長）、小室正紀（慶應義塾大学経済学部教授）ほか。

プログラム等詳しい内容については、<http://www.hfea.info/program.html/>にある。

- 生命保険概論 1（春）、2（秋）：2010 年度より開講。OLIS の寄附講座による。生命保険に関連する種々の話題について実業界・大学など直接この分野にかかわっている外部講師を招いたオムニバス形式の講義。講義は矢上キャンパスで開講されるが、遠隔講義で三田キャンパスの経済学部の学生も受講できるようにした。

【研究メンバー】

厚地 淳（経）、戸瀬信之（経）、宮崎直哉（経）、新井拓児（経）、前田吉昭（理工）、田村明久（理工）、仲田均（理工）、田村要造（理工）、亀谷幸生（理工）他。

意味フレームに基づく日英バイリンガル語彙データベースの構築

研究代表者 小原京子（理工学部）

Ⅰ. 研究概要

従来のバイリンガル辞書では、見出し語を直接ある訳語に対応付けるということがなされてきているが、ある言語のある語彙項目の多義構造と一見その語彙項目に対応する別言語の語彙項目の多義構造が完全に合致することはまれである。

そこで、本研究では、日常活動を通じて形成された典型的場面についての構造化された知識である意味フレームを介して、日英語の語彙項目を対応付けることを試みている。分析結果を日英バイリンガル語彙データベースとして Web 上に公開し、利用者が状況に応じた的確な訳語とその訳語の例文を見つけられるようにしている。

Ⅱ. 研究成果

1. 活動報告

意味分野「感情」とそれに属する日本語の語彙項目について語義分析を行い、例文に意味タグ付けを行った。またそれらの日本語の語彙項目を意味フレームごとに英語の語彙項目に対応づけた。その結

果を日英バイリンガル語彙データベースに記述し、Web上に公開した。

2. 刊行物

- Ohara, Kyoko Hirose (2009).“Frame-based contrastive lexical semantics in Japanese FrameNet: The case of *risk* and *kakeru*” in Boas, Hans C. (ed.) *Multilingual FrameNets in Computational Lexicography: Methods and Applications*. 163-182. Mouton de Gruyter.
- Ohara, Kyoko Hirose (2009).“Interactions between Constructions, Frames, and Pragmatics: The Perspective-providing Construction in Japanese” The 11th International Pragmatics Conference (IPrA11th). Melbourne, Australia. July 2009.
- Sato, Hiroaki (2009).“Browsing Japanese FrameNet with FrameSQL.” In *The Proceedings of 11th Conference of the Pacific Association for Computational Linguistics (PACLING 2009)*.
- 曾根孝明、小原京子、斎藤博昭 (2010).『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を対象とした全文検索システム』『言語処理学会第16回年次大会発表論文集』,pp. 506-509.
- Tagami, H., Hizuka, H., Saito, H. (2009).“Automatic Semantic Role Labeling based on Japanese FrameNet - A Progress Report -,” In *The Proceedings of the 11th Conference of the Pacific Association for Computational Linguistics (PACLING2009)*.

【研究メンバー】

小原京子(理工)、斎藤博昭(理工)、佐藤弘明(専修大学)、石崎 俊(環境情報)、木越壽子(言語アナリスト)

究の教員が、それぞれの視点から1つの同じ環境問題を解析して、総合的な理解を図る。

II. 研究成果

1. 活動報告

- 2009年度は、法学部設置の「自然科学総合講座」という授業を、本研究メンバーを中心に実施した。本研究のテーマである多様な視点から「エネルギー問題」「地球温暖化と生物多様性」について、法律・政治・物理・化学・生物学の視点からオムニバス形式で講義を行った。
- 上記授業を通して関心を持った学生が、研究メンバーによって定例で実施している研究セミナーに参加してくれた。
- 多様な視点として、各分野の教員による授業に関連するウェブサイトや参考文献のデータベースを、本研究プロジェクトのウェブサイトにて作製した。
- 環境問題を体験するために班員による野外実習も真鶴と西表島で実施された。

2. 刊行物

- 一貫校合同による夏季臨海実習Ⅲ — 中・高・大学生の連携のモデルケースとして — 谷口真也・秋山豊子他 慶應義塾大学日吉紀要自然科学 No.47, 63-81 (2010)
- 西表島野外実習報告Ⅲ — 未来先導基金公募プログラム 野外に飛び出せフィールドワーク 「慶應義塾夏の学校2009」の取り組みとして — 亜熱帯生物圏における生物多様性の観察と環境問題 秋山豊子他 慶應義塾大学日吉紀要自然科学 No.47, 83-110 (2010)

【研究メンバー】

秋山豊子(法)、六車 明(法科大学院)、大平 哲(経)
小林宏充(法)、浅野真希(法)、四宮 愛(法)

多様な視点からの環境問題の検討と環境教育の試み

研究代表者 小林宏充(法学部)

I. 研究概要

環境問題を理解し、解決策を検討するには、文系・理系の知識や幅広い視点が必要となる。本共同研究は、法学・経済学・物理学・化学・生物学・地域研

プラナリア有性化に伴う GSC / ニッチ・システムの誘導機構に関する細胞生物学的研究

研究代表者 松本 緑 (理工学部)

I. 研究概要

環境の変化や世代などに応じて無性生殖と有性生殖の2つの生殖様式を転換する動物では、無性生殖から有性生殖への切り替えには生殖方法が有性生殖に限定された動物とは異なり、必要に応じて多能性幹細胞から配偶子幹細胞 (GSC) / ニッチ・システムを誘導する。本研究の目的は、プラナリア有性化に伴う GSC / ニッチ・システムの誘導機構の解明である。

II. 研究成果

● プラナリアにおける GSC およびニッチ細胞の同定
プラナリア有性個体では、GSC やニッチ細胞の存在はわかっていない。そこで、プラナリアから GSC 特異的遺伝子と考えられている *Nanos* ホモログ遺伝子を単離し、発現解析や機能解析を行なうことにより、*Nanos* が GSC 分化に決定的な影響を及ぼすことが示された。

● 有性化に伴う GSC / ニッチ・システムの誘導過程の解析

セルソーターを用いて、プラナリアの多能性幹細胞を単離することに成功した。今後、ネオブラストから GSC / ニッチ細胞への誘導機構の解明が期待される。

【研究メンバー】

北村 誠 (理工)、小林一也 (医)、前澤孝信 (理工)、松本 緑 (理工)

ソーシャルキャピタルを育む女性研究者支援(日吉ワーキンググループ)

研究代表者 浅川順子 (商学部)

I. 研究概要

● 日吉の教職員を対象とするアンケート調査

6月：記述式アンケートを日吉教員へ配布し意識及びニーズ調査を実施。

● 在学生を対象とする講演会・交流会の開催

6月3日：講演会 (商学部 樋口美雄)

「なぜ、いま、ワーク・ライフ・バランスか」

6月15日：在学生対象交流会 (横浜市立大学 野々瀬真司氏 / 産業技術総合研究所 野々瀬菜穂子氏)

「女性研究者として輝き続けるためには？」

10月19日：講演会 (東レ経営研究所 渥美由喜氏)

「男性にとってのワーク・ライフ・バランス 男女共同参画」

● 教職員対象の座談会開催

11月18日：日吉教員座談会

● 他大学との交流会

5月28日「女性研究者支援～他大学の取り組みに学ぶ」

講師：京都大学 登谷美穂子氏 / 早稲田大学 棚村政行氏 / 東京大学 都河明子氏

II. 研究成果

● 学生に対するエンパワーメント支援として、卒業生との交流会によるロールモデル提供、及び講演会により学生自身のワークライフバランスのあり方やキャリア設計を考える機会を提供した。

● 教員対象として、記述式アンケートによるニーズ調査を行い、慶應義塾大学に於ける男女共同参画推進に向けて、今後の活動のための資料を作成した。

● 教員座談会では主にアンケート調査の結果に基づいて話し合わせ、課題抽出を行うことができた。

● 他大学との交流会では、男女共同参画をすでに推進している他大学から活動について報告を受け、活動の進め方等について多くの示唆を受けた。(交流会講師による講演はDVDに記録)
また、質疑の場では本大学と京都大学、早稲田大学、東京大学との意見交換ができた。

【研究メンバー】

浅川順子 (商)、宇沢美子 (文)、吉田恭子 (文)、不破有理 (経)、永井容子 (経)、鈴木 透 (法)、常山菜穂子 (法)、石光輝子 (商)、朝比奈緑 (商)、久保田真理 (医)、佐々木玲子 (体育研究所)、小熊祐子 (スポーツ医学研究センター)

ソーシャルキャピタルを育む女性研究者支援(矢上ワーキンググループ)

研究代表者 岩波敦子(理工学部)

I. 研究概要

- ワークライフバランスを考える研究者の夕べ(講演会)開催
5月26日:第3回 武内宏樹氏、純子氏(花王株式会社)
10月31日:第4回 加藤雄一郎氏(東京大学工学系研究科)、智子氏(理化学研究所)
- 女性研究者ネットワークの構築
10月30日、3月12日:矢上女性教職員を対象としたランチョンミーティング実施
- 女子高校生を対象とした出張講義等のエンパワーメント支援
7月16日、11月21日 慶應女子高セミナー実施

II. 研究成果

- パートナーと良い関係を築きながら、着実に研究者としてのキャリアを積んでいる各業界のロールモデルを紹介し、学生自身のワークライフバランスのあり方やキャリア設計を考える機会を提供した。
- 女性教員を対象としたランチョンミーティングを実施し、定期的な情報交換の場を提供した。
- 高校生へのエンパワーメント支援として女子高にて出張セミナーを実施し、理工学部や研究者生活を紹介した。また進路について学生からの質疑の時間を設け、理工学部への進学促進を行った。

【研究メンバー】

岩波敦子(理)、松本 緑(理)、犀川陽子(理)、市古みどり(矢上メディアセンター)、佐藤 朋(矢上研究支援センター)、神成文彦(理)、高山 緑(理)、松尾亜紀子(理)

可積分系の代数解析学

研究代表者 池田 薫(経済学部)

I. 研究概要

戸田格子は可積分系のなかでも、リー群の表現論とかかわりの深い方程式系である。戸田格子のハミルトニアンは群論的にはシュバレー不変式といわれているものである。戸田格子のラックス行列をヤコビ元といわれる3重対角行列からヘッセンバーグ行列といわれる下三角行列に拡張したものをフル・コスタントー戸田格子という。このフル・コスタントー戸田格子はシュバレー不変量の他に、ある系列の放物型部分群たちの作用に関する不変式をハミルトニアンとして持っていることが知られている。放物型部分群に関する双対不変式の理論は概均質ベクトル空間の理論を通じ数論の分野であるゼータ関数と密接なつながりを持つ。さらにフル・コスタントー戸田格子の等位集合の研究は幾何学的に深い問題を提起している。研究組織の5名は数論、幾何学、数理物理学の研究者であり本研究期間中に研究論文や講演の形で研究結果を発信した。

II. 研究成果

- K.Ikeda, The algebraic integrability of the quantum Toda lattice and the Radon transform, Jour Fourier Anal. Appl. 15(2009), 80-100.
- M.Katsurada, Asymptotic expansion for certain multiple q-integrals and q-differentials of Thomae-Jacson type, in "Proceedings of Diophantine Analysis and Related Fields 2010"(to appear).
- M.Katsurada, Asymptotic expansions for the product averages of higher derivatives of Lerch zeta-functions, in "R.I.M.S. Kokyuroku, (to appear).
- N.Miyazaki, On non(anti) commutative super twistor spaces to appear in IJGMMP.
- T. Noda, Laplace-Mellin transform of the non-holomorphic Eisenstein series, in "R.I.M.S. Kokyuroku," No.~1665, 2009, pp.94-99.

【研究メンバー】

池田 薫(経)、桂田昌紀(経)、宮崎直哉(経)、天羽雅昭(群馬大学)、野田 工(日本大学)

文化財をめぐる教養教育と地域文化振興への実践的研究——東海道の浮世絵と物語を端緒に

研究代表者 津田真弓(経済学部)

I. 研究概要

三井記念美術館特別展「慶應義塾創立 150 年記念 夢と追憶の江戸——高橋誠一郎浮世絵コレクション 名品展」(2009 年 9 月 19 日～11 月 23 日)を契機に教育的文化財活用をさまざまな視点で考察した。

II. 研究成果

上記展覧会の理解を深める「知って触る浮世絵展——高橋誠一郎コレクション学習イベント」(於: 来往舎ギャラリー 2009 年 9 月 25 日～10 月 2 日、9 月 26 日に講演会)の準備と運営を行い、文化財をどう将来に活用していくかという問いかけと、一つの解答を示した。

- 高橋誠一郎コレクションで浮世絵を知る (パネル展示)
- 浮世絵で旅する東海道 (展示パネルと慶應義塾図書館所蔵古典籍の展示)
- 言葉と手で浮世絵を見る (視覚障害者用「触図」作成および体験コーナー)
- 東海道五十三次をめぐる講演会 (元金城学院大学教授木村八重子氏「“東海道五十三次”の謎」、学習院大学落語研究会「二人旅」)

成果は、冊子での記録と、WEB (<http://web.keio.jp/~edo/exhibition2009/top.htm>)に掲載。

【研究メンバー】

塩澤修平 (経)、丸山 徹 (経)、池田幸弘 (経)、津田真弓 (経)

生命の教養学

1. 2009 年度の概要

「生命の教養学」のコンセプトは、文理横断した多様な学問領域から一流の講師陣を招き、生命をキーワードにしたテーマをめぐって刺激的な講義を学生に与えることである。2009 年度のキーワードは「ゆとり」であった。いわゆる「ゆとり教育」が、その間違いが認められるような形で撤回されたあと、「『ゆとり』とはいったいなんだろうか」という問いは、単純けれども奥が深いのではないかという読みをもって設定したテーマである。

私の専門である医学史にとって、「病気とは何か、健康とは何か」という問いは根本問題になるが、そこでも「ゆとり」という概念は重要である。フランスの科学史・科学論の泰斗であった G. カンギレーム (1904-95) は『正常と病理』(1966) のなかで、生命における正常な状態と病理的な状態の違いを厳密に検討して、前者を「新しい規範への移行を許容することができる状態」「偶然による変化に対して開かれている安定性」とであると結論した。つまり、健康というのは、安定していると同時に、「ゆとり」を持って安定しているということである。このそれぞれの分野の不思議な広がりを持つ「ゆとり」というものを色々な学問から探求する機会を学生たちに提供することが、今年の授業の狙いであった。

私たちコーディネイターの期待を裏切らず、お招きした講師の皆様は、それぞれのご専門の中から「ゆとり」について考え、それについて語ってくださった。講師と講演タイトル(一部)の一覧は以下のとおりである。

- 4 月 17 日・24 日 長谷川真理子 (総合研究大学院大学先端科学研究科教授) 【ゆとりの進化生物学的基盤】
- 5 月 1 日 鈴木 款 (静岡大学創造科学技術大学院静岡研究院長、教授) 【見えない自然の循環が生命を支える：サンゴ礁からのメッセージ】
- 5 月 8 日 日高敏隆 (京都大学名誉教授)・幸島司郎 (京都大学教授) 【『環境問題』とは何か？】
- 5 月 15 日・22 日 坂根徹夫 (情報科学芸術大学院大学名誉学長) 【『遊び』の比較文化論的考察について】
- 5 月 29 日・6 月 5 日 西成活裕 (東京大学大学院工学系研究科教授) 【様々な渋滞とストレス】
- 6 月 12 日 高山 緑 (慶應義塾大学理工学部准教授) 【しなやかに生涯発達するひとのちから】

- 6 月 19 日 前野隆司 (慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科教授) 【脳の記憶・学習とゆとり】

2. 「生命の教養学」というコンセプトについて

今年の授業では、「生命の教養学」という授業のコンセプトと方向性について整理する機会を与えられた。「教養学」というコンセプトの近年の高まりの背後には、学問領域の断片化という古くて新しい問題がある。OECD が 1990 年代の終わりから唱えている「コンピテンシー」の概念、すなわち、国際化と情報化、そしてそれぞれの問題が多様性と複雑性を増している現代社会において、「大学を出た」という資格をもつものが共有するものとしての「学士力」の柱は何だろうかという問いに対して、21 世紀に入ってから日本でも海外でもさまざまな大学による取り組みが目立っている。その意味で、教養学の概念は、高等教育をめぐる直近の動向に反応したリアルタイムな取り組みということになる。

しかし、この問題自体は OECD などよりもはるかに長い系譜を持つ。理系と文系の学問の断絶ということでは、C.P. スノウ (1905-80) の『二つの文化と科学革命』(1959) が提起した問題、すなわち「一方の文系の知識人がいて、もう一方に科学者がいる。この二つの極の間には、相互の無理解という溝があって、特に若い人たちの中には、相互への敵意と嫌悪すらある」という問題を、大学教育の中で解決するにはどうすればよいかという課題は、この半世紀間にわたって高等教育にたずさわるものにつきつけられている問題である。さらにさかのぼれば、古典語を中心とする人文系の「ヒューマニスティックな」高等教育に対して、専門的・実務的な志向をもつ理系の教育をどのように位置づけるかという問題は、19 世紀以来のヨーロッパでの論争の一つの中心であった。

すなわち、「生命の教養学」は、理系と文系を横断したコンピテンシーという現在の文脈の中で考えなければならないものであると同時に、社会と文化における科学技術の上昇という長いタイムスパンの中でも考えなければならない。この立体的な問題の中で、どのように授業を構成すればよいのかという課題は、この授業にかかわるコーディネイターと講師が深く考えなければならないポイントである。

(鈴木晃仁)

飲み物を片手に、気軽なスタイルでサイエンス談義に混じることのできるカフェ、日吉キャンパス来往舎の「サイエンス・カフェ」は、極東証券寄付講座『生命の教養学』の公開講座という位置づけで2007年初夏に開店してから、およそ2ヶ月に1度のペースで着実に開催されている。当初からこちらが期待した通り、子供のお客様もかなり多く、大学の講義などではなかなか見られないような大変活発な質疑応答がある。このカフェで話題提供をする話し手にとっては、子供にもわかるような話し方を工夫する良い機会ともなるし、また、思いもかけない質問を受ける貴重な体験の場となっている。相互に良い刺激を与えつつ、このカフェはこれからも続いていくことだろう。このカフェの活動によって、大学で行われている研究活動が少しでも社会に還元され、特に次代を担う若い伸びやかな頭脳にとって良い時間空間となることを期待している。

「通りがかりにちょっと寄ってみたいカフェ」であることを目指し、第10回までは事前申し込み不要としていたが、準備の都合上、第11回からはなるべく事前の連絡をお願いすることになり、その後、参加希望者がどんどん増加したため、ついに第14回からは定員を明示することになった。カフェが繁盛するのは喜ばしい反面、開店当初の気軽さが無くなっていくのが、少なからず残念ではある。

以下に2009年度に開催された第12～17回のタイトル、講師、ポスターの宣伝文、参加人数を列記する。

第12回 夜の森のにぎわい——野ねずみ達のくらし

2009年5月30日 坂本信介(総研大・葉山／首都大・動物生態)

夜の森の中、そこは野ねずみ達の世界です。真っ暗闇の中、彼らはどんな風に暮らしているのでしょうか？ 当日は、彼らの暮らしぶりを紹介するとともに、みなさんに夜行性の動物になってもらいます。夜行性の哺乳類の世界がどのようなものか体験してみましよう。

参加人数：52名

第13回 家族で暮らすハチの話

2009年7月18日 片田真一(経済学部・生物学)

刺されると痛いハチですが、腰をすえてじっくり観察してみると、家族が助け合って生活する様子が見えてきます。皆さんも一緒に、彼らの生態をのぞいてみま

せんか。(ハチに刺されないコツもお教えます)

参加人数：64名

第14回 身近で活躍する放射線——宇宙放射線から医療放射線まで

2009年9月12日 井上浩義(医学部・化学)

放射線を知っていますか？ 宇宙から降り注ぐ放射線、食物から出てくる放射線、病気の診断や治療に活躍する放射線、様々な放射線がわたしたちの周りに存在します。放射線について、聞いて、話して、体験してみませんか。

参加人数：44名

第15回 アカテガニが守った小網代の谷

2009年11月14日 岸 由二(経済学部・生物学)

○三浦半島・小網代の生物多様性 ○アカテガニの暮らし ○小網代保全の柱であったカニパトロールのマニュアルに科学的な基礎を提供した、アカテガニの放仔の時間特性に関する市民協働の科学

参加人数：37名

第16回 メダカの♂♀のはなし

2010年1月23日 四宮 愛(法学部・生物学)

私たちヒトと同じように、メダカにも雄と雌がいます。雄と雌では何が違い、その違いは何によって生み出されるのでしょうか？ 今回のサイエンス・カフェでは、雄と雌(性)に関するメダカを使った研究——性を決める遺伝子、性転換するメダカ、メダカの仲間(メダカ属魚類)の性、etc.——を紹介します。

参加人数：46名

第17回 二枚貝を覗いてみよう

2010年3月27日 伊藤篤子(商学部・生物学)

牡蠣・帆立・貽貝・浅利・蛤・蜆 etc……身近でおいしい食材の裏側。料理の手軽さと手ごろな価格から魚介類の中でも日々の食卓に登場する機会の多い二枚貝。古くから養殖も盛んでたくさんの研究がなされてきました。生化学・分類学・水産学・医学・環境学など各方面から二枚貝にまつわるお話を紹介します。当日は解剖と観察を含む簡単な作業も予定しています。普段から気軽に食べている二枚貝たちを、自分の目で、あるいは顕微鏡を使って、一度じっくり覗いてみませんか？

参加人数：40名

(鈴木 忠)

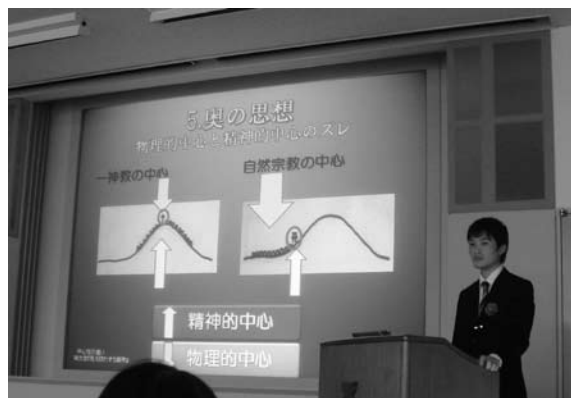
2005年よりこの名称で開講されている『アカデミック・スキルズ』は大学において学ぶべきもっとも基本的な二つのスキルである論文の書き方とプレゼンテーションの方法を少人数クラスで徹底的に指導することを目的としている。2009年度は、基礎編『アカデミック・スキルズⅠ・Ⅱ』（通年授業、春学期はⅠ、秋学期はⅡ）を3クラス、中級編『アカデミック・スキルズⅢ・Ⅳ』（通年授業、春学期はⅢ、秋学期はⅣ）を1クラス開講した。以下、各クラスの目的および内容について詳述したい。

『アカデミック・スキルズⅠ・Ⅱ』の目的は、論文の書き方とプレゼンテーションの方法の基礎をじっくりと習得していく点にある。通常、春学期は論文の書き方の指導に専念し、秋学期からプレゼンテーションの指導を行なうというスケジュールを設定している。それは各自の関心をアカデミックな場に発信するにあたって、論文作成の段階で鍛錬されるリサーチ能力や論理的な思考が基本になるという認識に基づいている。月曜5時限クラス（担当：赤江雄一、佐藤元状、識名章喜、履修者：Ⅰは17名、Ⅱは16名）と水曜5時限クラス（担当：大出敦、篠原俊吾、不破有理、横山千晶、履修者：Ⅰは18名、Ⅱは16名）は、この伝統的なスケジュールにのっとって授業運営を行なった。論文からプレゼンテーションへという流れの中で、ゆるやかなテーマ（月曜クラスは「恋愛の古今東西」、水曜クラスは「身近な知の世界を掘り下げよう」）を掲げ、学生を知的に刺激し、各自の関心を引き出しながら、論文およびプレゼンテーションの作成へと導いた。金曜5時限クラス（担当：新井和広、坂倉杏介、徳永聡子、履修者：Ⅰは20名、Ⅱは20名）は春学期からディベートを授業に取り入れ、論文からプレゼンテーションへという従来のスケジュールとは異なる授業形式を採用した。この形式は早い段階からグループワークを積極的に取り入れることで、クラスとしての結束力を高め、結果的に、学生同士が積極的に助けあう効果をもたらした。

木曜2時限目の『アカデミック・スキルズⅢ・Ⅳ』（担当：佐藤元状、武藤浩史、横山千晶、履修者：Ⅲは13名、Ⅳは13名）は原則として『アカデミック・スキルズⅠ・Ⅱ』の既習者を対象に、論文の書き方とプレゼンテーションの方法をさらに高度なレベルに高めるための指導を行なった。本年度は、春学期が「精神分析と歴史研究」、秋学期が「精読と

批評」という副題の下、幅広いジャンルの著作を検討し、学際的な知を養うとともに、テキストの精読の訓練を行ない、独創的かつ先鋭的な論文の執筆に導いた。

合計4クラスからなる『アカデミック・スキルズ』の一年の成果は、公開プレゼンテーション・コンペティション（2010年2月4日、来往舎シンポジウムスペース）および『2009年度アカデミック・スキルズ学生論文集』に結実した。コンペティションでは、塾内外から多くの聴衆を迎え、各クラスの代表、8名が口頭発表を行ない、厳正な審査の結果、金賞1名、銀賞3名、銅賞3名、奨励賞1名が選ばれ、表彰された。また、論文部門では、合計8名の代表者の中から、金賞2名、銀賞4名、銅賞1名、特別賞1名が選ばれ、表彰された。学生が主体となって編集した『学生論文集』には、学生論文のほかに、授業の概要、講評、ブックガイドなどが含まれており、充実した内容になっている。（篠原俊吾）



「公開プレゼンテーション・コンペティション」
（2010年2月4日、来往舎シンポジウムスペース）

ピア・メンター

教養研究センターは、2008年度からメディアセンターとの共同事業として「学生の学習環境を整える」プロジェクト（「学び場プロジェクト」と略称する）を行っている。学生同士の間の学びの連関を図ること、学びの場としての図書館の役割を見直し必要な整備をすることがねらいである。慶應義塾大学は、互いに切磋琢磨し自律的な学習・研究を行う能力を有する学生を大量に擁し、また、特色のある研究・教育および支援活動を展開している多くの学部とセンターがある。このような義塾に蓄積された豊かな教育・研究資産を有機的に連携させ、学生にとってわかりやすく利用しやすい新たな学びの場を、大学における学びの基礎を固める場である日吉キャンパスにおいて構築する試みの一環である。

本プロジェクトの中心的な活動が、「学習相談アワー」である。これは、教養研究センターが開設する科目「アカデミック・スキルズ」を修了した学生の有志が学習相談員としてメディアセンターのレファレンスカウンターに座り、レポートの書き方・文献検索の方法に関する学生からの相談に対応する取り組みである。2009年度は、春学期は6月8日～7月10日の25日間、秋学期は10月5日～1月15日の57日間の2期にわたって行われ、多くの成果を上げることができた。

「学習相談アワー」は、相談者と学習相談員の双方にとって新たな学びの機会となっている。相談者にとっては、学部学生・大学院生からなる学習相談員は、自分たちと同じ目線を持った存在であり、スタディスキルに関する悩みを気軽に相談することができ、また自分たちの悩みに親身なアドバイスを期待できる。一方、相談員の学生は、相談に対してわかりやすく対応する過程で、自分たちの持っている知識を全体的に見直し向上させるモチベーションが得られている。また、とやかに座る図書館員から、相談の受け方・文献検索の仕方についての高度なスキルを学ぶこともできる。さらに、図書館員も学生相談員による学生の視点からの相談への対応のしかたを観察することで、普段気づきにくい学生の躰きとそれに対する有効な回答の仕方を知ることができ、刺激を受けている。

受けた相談内容は相談メモとして蓄積され、学習相談員の間で回覧され、相談スキルを高めることに役立っている。相談メモの内容は大学教育の改善のための貴重な資料であるので、データベース化して

教職員に提供していきたい。

本活動は学習相談員の自発的な熱意に支えられている。学習相談のための様々な資料の作成を進めていると同時に、レポートの書き方・ノートテイキングのしかたなどについて、相談員自身が企画展示を行っていてもいる。まさに、学生主体で「半学半教」の場づくりがなされている。

（種村和史）



学習相談アワー 学習相談コーナーにて

教員のためのサポート

【総括】

近年、大学教育を取り巻く環境は激変している。学生たちの気質や生活習慣も一昔前とは様変わりし、教員としてどのように対応すべきか頭を悩ませることも少なくない。このような状況に対処するための知識と経験および設備が、慶應義塾には様々な部署、様々な人材の中に蓄積されているが、情報の共有が充分でないためにせっかくの財産が個々の教員に十分に生かされているとは言えない。このような現状に鑑み、教養研究センターでは、「教員サポートワークショップ」を開催し、研究教育に資する様々な知識とスキルを紹介している。

本年度は、「メディアリテラシーワークショップ・メディアセンターサービス活用術パワーアップ編——少人数セミナー授業での実践ワークショップ——」(7月1日、日吉メディアセンター共催)・「少人数セミナーの指導法について——“アカスキ”のノウハウを盗もう!——」(11月18日)・“学生の悩みについての悩み”を解消するために——教員と学生相談室との連携について——」(1月14日、日吉学生部(学生支援部門))の三種類のワークショップを開催した。

「メディアリテラシーワークショップ」では、日頃、図書館員として日吉の学生向けの情報リテラシーセミナーを担当している島田貴史氏から、資料に確実に辿りつくための検索キーワードの立て方・様々な検索ツールの使用法・収集した資料の整理の仕方など、メディアセンターの所蔵する資料と提供するサービスを活用した、問題発見—資料収集—問題考察—レポート作成のプロセスを学生に習得させるための効果的な指導法が紹介された。

「少人数セミナーの指導法について」は、スタディ・スキル習得のための少人数教育の指導法にヒントを提供するために開催された。教養研究センターが開講する「アカデミック・スキルズ」を担当する篠原俊吾氏(法学部)から、複数教員による共同担当体制、プレゼンテーションコンペや優秀論文集発行などモチベーションを高める取り組みなど、この授業のユニークな特徴が紹介された。

「“学生の悩みについての悩み”を解消するために」については、次項に詳しい内容を紹介する。

(種村和史)

【“学生の悩みについての悩み”を解消するために】

1. 活動の趣旨ならびに目的

近年、慶應義塾のみならず、他の教育機関においても、発達障害と思しき学生数が確実に増加している。しかし、発達障害という概念自体、なお広く浸透しているとは言い難く、実際に教職員として現場に立っていても、外見上、気力や理解力が欠如しているかにみえるこのような学生とどう向き合うかは大きな問題である。また、発達障害者支援法の施行や特別支援教育の開始からしても、これをサポートすること自体がすでに大学に対する社会的要請となりつつあるように思われる。

こうした状況に鑑み、教養研究センターでは2007年度に萩原豪人先生に発達障害の定義や実情、またそれに対する具体的な対処法や大学そのものの役割についてご講演いただき、2008年度、そうした理論的側面を踏まえたうえで、アソシエイト・カウンセラーの佐藤暁美さんに相談の具体例や問題点を紹介していただいた。そして今回は菊住彰先生による「学生の悩みについての悩み」である。例えば、私たちは学生から個人的な悩みを打ち明けられて対処に困ることや、こちらの意図と学生の反応の間に生じる大きなギャップに驚かされることがあるが、このタイトルが意味するのは、教職員がまさに学生の悩みを認識したとき、それを有効なサポート体制へとつなげていくプロセスの難しさである。詳細は次の通りである。

2. 活動内容

講演会『“学生の悩みについての悩み”を解消するために——教員と学生相談室との連携について——』

日時：2010年1月14日 18:15-19:45

場所：日吉キャンパス来住舎1階シンポジウムスペース

講師：菊住彰(慶應義塾大学 日吉学生相談室カウンセラー)

司会：鈴木直樹(経済学部)

今回の講演では、問題を抱えた学生が学習指導を介して相談室へ辿りついた例、ならびに学生本人ではなく、研究室の指導教員や友人がまず相談室を訪れた例をお話しいただいた。匿名でのケーススタディーではあったが、それぞれが示唆に富む内容で、参加者はこうした具体例を知ることによって実際の相談を疑似体験できたのではないと思われる。さらに質疑応答では、学生への連絡の取り方や声の掛け方、懇談会のメリット、教職員とカウンセラーの立場の違い、学校間の連携など多岐にわたるテーマが話し合われた。(鈴木直樹)

日吉行事企画委員会 (HAPP)

【プロジェクトの内容と目標】

日吉行事企画委員会 (HAPP) は、春の新生歓迎行事、秋の公募企画行事の二本柱によって、2009年度も運営した。新生歓迎セッションは、主として春学期に行う依頼型のプロジェクトで、第一線で活動するアーティストや地域住民を巻き込んだ行事を行っている。一方、公募企画セッションは、主として秋学期に行う塾生・教職員の自主企画を HAPP が後援するものである。新学期早々には公募を開始し、夏休み前には選定を終えている。この際、様々な行事の主催者として、日吉行事企画委員会は、①安全であること、②大学として行う価値のあるものを開催することの二点に常に留意している。2009年度で特に反響を呼んだのは、「土のいのち～どろだんごと左官の技」である。この企画では、INAX ライブミュージアムの協力により、子供と大学生が、一緒に泥団子を作り、年齢を超えた交流によって地域連携の役割を十分に果たすことができた。続いて、挟土秀平氏の講演は、非常にエキサイティングで、講演後は活発な質疑応答が行われた。

【現在の目標達成度】

日吉行事企画委員会は、年3回、全体会議(6月、12月、1月)を行い、各企画内では、担当委員、事務局、責任者間で頻りに打ち合わせを行っている。特に2009年度は、音出しについてのクレームを受けて、その対応について勢力的に議論を行い、HAPPとしてのガイドラインを作った。

【2009年度春の新生歓迎行事】

▼ギターに生きる一坂場圭介を聴く。演奏者本人のトークを交えたギター演奏。ギター：坂場圭介、ピアノ：清水佐和子。5月21日16:30～18:00。来往舎イベントテラス。

▼『九月に降る風』上映・講演会。台湾映画の上映・講演会。5月27日映画上映15:00～、講演17:00～。来往舎シンポジウムスペース。

▼演奏会シリーズ「啓蒙主義と音楽」連続演奏会

・第1回：講演会「フランス・ロマン主義の再発見——アルカンのピアノ音楽を中心に」。講演：フィリップ・コミネッティ、対談：フィリップ・コミネッティ×寺嶋陸也。6月8日18:15～。来往舎シンポジウムスペース。

・第2回：「啓蒙主義からロマン主義へ」～寺嶋陸也ピアノ・リサイタル～。6月15日18:30～。協生館藤原洋記念ホール。

・第3回：「転換期のチェンバロ音楽」～広沢麻美チェンバロ演奏会～。7月3日18:30～。協生館藤原洋記念ホール。

・第4回：「啓蒙主義時代の音楽」～慶應義塾コレギウム・ムジクム演奏会～。7月15日16:30～。来往舎イベントテラス。

▼環境週間。パネルディスカッションや展示講演会などのイベントを開催し環境問題への関心を喚起する企画。6月22日～27日。日吉キャンパス。

▼土のいのち～泥だんごと左官の技。泥だんご制作ワークショップと左官による土の造作技術実演付き講演会。7月4日13:30～15:00 だろだんごの時間(ワークショップ)、15:30～左官の技：挟土秀平さんのお仕事を紹介する映像上映、16:00～17:30 挟土秀平講演会。*だろだんごワークショップのみ要事前申込。来往舎シンポジウムスペース。

【2009年度秋の公募企画行事】

■知って触る浮世絵展——高橋誠一郎浮世絵コレ



「土のいのち～泥だんごと左官の技」
(2009年7月4日、シンポジウムスペース)



「土のいのち～泥だんごと左官の技」
告知用チラシ

日吉キャンパス公開講座 運営委員会

クシオン学習イベント(教員企画)。高橋コレクションを知る、浮世絵で東海道を旅する。目を閉じて浮世絵を「見る」体験。展示：9月25日～10月2日 10:00～18:00。来往舎ギャラリー。講演会：木村八重子氏「"東海道五十三次"の謎」(歌川広重の浮世絵について)。9月26日 13:30～15:30。第4校舎 独立館 D205 教室。

▼特別企画 OTO の会 新作コンサートシリーズ No.11 来往舎 秋・空・響 Part. 2～音の舞～。邦楽+洋楽のための新曲にダンスを組み入れた、音と身体表現融合の試み。10月3日 16:00～18:30。来往舎イベントテラス。

■DIVERTA!!2(学生企画)。ジャグリングを中心としたステージパフォーマンスショー。10月14日・15日 18:30～19:45。来往舎イベントテラス。

■色彩と記憶の音楽(学生企画)。楽器演奏とそれに連動した映像による時間と空間の表現。10月22日 17:00～19:00。来往舎イベントテラス。

▼特別企画 塾長と日吉の森を歩こう。塾長と学生がともに日吉の森を散策。10月31日 14:00～12番教室集合。申込受付 10月13日～先着30名(2年生以上も参加可)。

■魔法はヒカリに乗って(学生企画)。複数の会場を高速ネットワークで繋ぐ技術を使った韓国との共同公演。11月2日 19:30～21:00。協生館藤原洋記念ホール。

■Labyrinth(学生企画)。鑑賞者を巻き込み変化する、光と音を用いたメディアアート作品の展示。11月30日～12月5日 15:00～21:00。来往舎イベントテラス。

■『09→10』展(学生企画)。「2009年～」という視点のもと若手作家の合同展を行う。12月14日～22日 10:00～19:00。※初日は13:00から、最終日は15:00まで。※20日は休館。来往舎ギャラリー。

■弦楽四重奏の世界クアルテット・エクセルシオ特別コンサート(教員企画)。斯界注目のカルテットがクラシック音楽の真髄に迫る本格的演奏会。1月15日 18:30～20:00。協生館藤原洋記念ホール。

(小菅隼人)

日吉キャンパス公開講座は、慶應義塾大学日吉キャンパスを中心として、慶應義塾が持つ知的リソースを地域社会に広く公開し還元することを主たる目標としている。2009年度開講分の詳細は以下の通りである。

【2009年度春期公開講座】

2008年度秋期公開講座「記録・記憶と構想の現場」との連携を念頭に置き、以下のような参加型少人数セミナー講座を開講した。いずれも各回120分、全4回で土曜日開講、定員は講座ごとに各25名、受講料は12,000円とした。受講者は全4講座のべて60名(うち塾生11名)、平均年齢45歳(最高齢80歳、最年少19歳)であった。従来公開講座は基本的に塾外の社会人を対象としてきたが、参加型少人数セミナーを開講するにあたり、受講者の年齢分布に幅を与えて刺激とすべく、本年度は塾生の参加を積極的に認めた。これについては講師、塾外受講者の双方から肯定的な評価を得ることができ、一定の成功をおさめることができたと考えられる。

講座1 見て・感じて・動いて味わうシェイクスピア

講師：横山千晶(法学部教授)

開講日：5月9日、16日、23日、6月6日

(全て土曜 10:00～12:00)

講座2 絵画を聞く、音楽を見る、自我の行方

講師：フィリップ・コミネッティ(商学部准教授)

開講日：5月9日、23日、30日、6月6日

(全て土曜 10:00～12:00)

講座3：ゲーテの『ファウスト』第1部を読む

講師：山本賀代(経済学部准教授)

開講日：5月16日、23日、6月6日、13日

(全て土曜 13:00～15:00)

講座4：創造する自己

講師：前野隆司(大学院SDM研究科教授)・武藤浩史(法学部教授)

開講日：5月9日、16日、23日、6月6日

(全て土曜 13:00～15:00)

【2009年度秋期公開講座】

「天からの文（ふみ）を読み解いてみよう——世界天文年に因んで——」というテーマのもと、天文学を中心に広範な領域より講師を招き、講義形式によるオムニバス講座を開講した。各回の詳細は以下の一覧の通り。土曜開講、各回90分×2コマ、全10回、受講申込は全10回セット（受講料8,000円）とした。定員300に対し受講者数291名（うち通信教育課程を含む塾生6名）、修了者数（6回以上出席にて修了証を授与）239名（82.1%）、全回出席者数76名（26.1%）、平均出席者数191名（72.3%）、平均年齢は60.4歳（最高齢85歳、最年少15歳）であった。

講座1 9月26日

- 3限 ガリレオ——初めて望遠鏡で見た宇宙の姿——
講師：表 實（東北公益文科大学副学長、慶應義塾大学名誉教授）
- 4限 天文学とは——天からの文（ふみ）を読む学問——
講師：表 實（東北公益文科大学副学長、慶應義塾大学名誉教授）

講座2 10月3日

- 3限 重力とダンス
講師：石井達朗（慶應義塾大学名誉教授・早稲田大学客員講師）
- 4限 飛天プロジェクト
——国際宇宙ステーションでのダンス——
講師：石黒節子（お茶の水女子大学名誉教授）

講座3 10月10日

- 3限 星空の魅力——四季の星座とその見つけ方——
講師：小林弘美（五藤光学研究所）
- 4限 地球の生命を育む太陽——光と影と……——
講師：表 實（東北公益文科大学副学長、慶應義塾大学名誉教授）

講座4 10月17日

- 3限 船乗りに届いた天からの文——北前船の場合——
講師：児玉光義（五藤光学研究所）
- 4限 宇宙を使う・学ぶ・遊ぶ
——宇宙開発とシステムデザイン・マネジメント——
講師：神武直彦（慶應義塾大学先端研究センター 准教授）

講座5 10月24日

- 3限 宇宙からの文
——宇宙の蜃気楼：重力レンズ効果——
講師：吉田 宏（福島県立医科大学准教授）
- 4限 ガリレオと美術
講師：金山弘昌（文学部准教授）

講座6 10月31日

- 3限 大規模複雑システムのデザインとマネジメント
講師：狼 嘉彰（システムデザイン・マネジメント研究科教授、東京工業大学名誉教授）
- 4限 ガリレオ裁判
講師：アルベルト・ボッターリ・デ・カステッロ（駐日教皇大使、大司教）

講座7 11月7日

- 3限 シェイクスピアの宇宙観
講師：小菅隼人（理工学部教授）
- 4限 月周回衛星「かぐや」が明らかにした最新月科学
講師：鳥海崇（慶應義塾大学体育研究所専任講師）

講座8 11月21日

- 3限 壮絶なる星の最期、超新星爆発
講師：固武慶（国立天文台理論研究部助教）
- 4限 宇宙の過去・現在・未来
講師：表 實（東北公益文科大学副学長、慶應義塾大学名誉教授）

講座9 11月28日

- 3限 19世紀の天文学とジュール・ヴェルヌ作品
講師：新島進（経済学部准教授）
- 4限 火星運河説をめぐる文学の冒険
講師：新島進（経済学部准教授）

講座10 12月5日

- 3限 2010年宇宙の旅
講師：巽孝之（慶應義塾大学文学部教授）
- 4限 インターネット望遠鏡の魅力
——何時でも・何処でも・誰でも・天体観測——
講師：表 實（東北公益文科大学副学長、慶應義塾大学名誉教授）
(坂本 光)

「芸術と福祉」国際会議の開催

Yokohama 2009 Art and Welfare International Conference

“Art for Community ⇄ Community for Art”

2009 年度「芸術と福祉」国際会議 「芸術は社会のために何ができるか・社会は芸術のために何ができるか」

2009 年 8 月 17 日～19 日開催

1. 趣旨

ともすればヴァーチャルな世界ですべての情報がやり取りされ、文字と視覚のふたつに伝達と表現の枠が狭められていっているこの時代に、ふたたび身体性と想像力を取り戻す作業の一環として、教養研究センターは「身体知」を重要視してきた。センターは「身体知プロジェクト」の実験授業においてアーティストのコラボレーションを展開し、芸術表現の可能性を模索してきている。（「身体知プロジェクト」の項を参照のこと。）

同じく現代の社会でもコミュニティ創生のツールとして芸術の意義が見直されている。芸術は非常に身体的な表現形態として、社会にメッセージを伝えるツールであり、さまざまな人々につながる手段であることを何よりも芸術家自身が昨今明確に意識しているからである。また、大学のみならず広く社会もその考えに共鳴しつつ、積極的に若い感性を育てようとしている。

教育の現場にふたたび目を転じてみると、コミュニケーション手段の変化により、若者たちが、より個人空間へと引きこもりつつあるという現状がある。一見若者たちはつながっているようでいて、その存在が分断されている。IT 以外の媒体を使ってふたたび人をつなげ、社会へと目を向けてもらう方法として、ここでも芸術の力が見直されるべきだろう。教養研究センターでも自分を知り、他人とつながるための芸術表現を使ったワークショップを数多く開催してきたが、ここでも明白になったのは、教育の現場や社会とアーティストたちが積極的に関係しあう時代が来たということである。

教育や社会と芸術との関係を国を超え、時代を超えてみいだすために、教養研究センターは第9回目を迎える「芸術と福祉」国際会議のホストを務めた。ここでは芸術と教育・社会の新たな関係性を見直すために「芸術」と「福祉」を分けることなく、同じ土壌で語り合う形式を取った。芸術活動のコミュニティでのアウトリーチは、新たな芸術のインスピレーションになりうるのか。そして芸術は社会や教育、

そして福祉活動の中にどのような位置を見出し、根付いていくのか。今回これらの問題を考えるために、センターがホストとして名乗りを上げたのは、まさに日吉キャンパスが位置する横浜市が2009年で開港150年を迎えるという時代的な背景もある。横浜は港を中心としてさまざまな異文化が出会い、さまざまな人々を受け入れてきた場所である。そのような環境の中で、まさに市は「クリエイティブシティ・ヨコハマ」のコンセプトのもとに、国内外から数多くのアーティストを招き、生み育て、その力を借りて新たに町を活性化している。アーティストとの連携が、福祉や異文化交流などの町づくりに生かされている世界的なモデルが横浜といえよう。同時に町づくりの構想に地域の大学が関わり始めていることにも注目したい。

この横浜を舞台に、さまざまな例と歴史的な意義を互いに会議の中で紹介し、話し合いつつ、同時にその現場を見て、感じてその場で関わっている人たちと話し合うことで、「会議」という場を社会の中へとさらに広げてみることも今回の会議の趣旨である。

2. 会議概要とスケジュール

開催日：2009 年 8 月 17 日～19 日

開催場所：慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎・

シンポジウムスペース

ヨコハマ・クリエイティブシティ・センター

主催：慶應義塾大学教養研究センター、Yokohama

2009 実行委員会

共催：デザイン史フォーラム、大阪大学 C S C D コミュニケーション・デザインセンター、ヨコハマ・クリエイティブシティ・センター（公益財団法人横浜市芸術文化振興財団）、科研（B）「比較デザイン論研究」

協力：慶應義塾創立 150 年記念事業室

スケジュール：

8 月 17 日 慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎・

シンポジウムスペース

08:30 受付開始

09:30 オープニング

開会挨拶 慶應義塾大学学務担当理事 長谷山 彰

09:45-11:00 基調シンポジウム「芸術と社会」

藤田治彦（大阪大学）

黒石いずみ（青山学院大学）

横山千晶 (慶應義塾大学)

11:00-12:00 参加者の紹介とディスカッション

12:00-13:30 昼食およびこれからの予定説明

13:30-14:05 発表① (25分+10分ディスカッション)

Henri C.A. BRAAKENBURG (Foundation for Educational Projects)

“The Maatschappij tot Nut van't Algemeen —the First Public Welfare Society in The Netherlands—”

14:05-14:40 発表②

小野修三 (慶應義塾大学)

「E・ハワードの田園都市と日本人」

14:40-15:15 発表③

Hiroko Masui (升井裕子), Japan Women's University

“The Campaign for Drawing: ‘To See Clearly is Poetry, Prophecy and Religion’ ”

15:15-15:35 コーヒーブレイク

15:35-16:10 発表④

金 相美 (大阪大学)

「視覚言語と現代社会——モホリ＝ナギ『ヴィジョン・イン・モーション』とその意義——」

16:10-16:45 発表⑤

Yoshie Itani (井谷善恵), Tama University

“Beauty Pictures on Old Noritake: Kutani Style Beauty Pictures & Geisha Images”

17:00 ウェルカム・パーティ

慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎
ファカルティ・ラウンジ

8月18日 ヨコハマ・クリエイティブシティ・センター (YCC)

09:00 慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎に集合
移動 ヨコハマ・クリエイティブシティ・センター (YCC) へ

10:00-11:00 コトラボ合同会社代表 岡部友彦氏の講演とディスカッション

11:00-11:15 コーヒーブレイク

11:15-11:50 発表⑥

板谷 慎 (青山学院大学大学院)

「地域開発デザインに於ける芸術と社会の関係：その問題と可能性への提案」

11:50-12:25 発表⑦

松本孝一 (青山学院大学大学院)

「食器と民家を通した芸術の社会性への問いと試み」

12:30-13:30 YCC にて昼食

14:00 寿フィールドワーク

16:30 中ムラサトコ氏のコンサート at YCC

18:00-19:00 黒沢美香氏&武藤浩史氏によるダンス公演とダンスワークショップ at YCC

8月19日 慶應義塾大学来往舎 シンポジウム・スペース

09:00-09:35 発表⑧

劉 賢国 (筑波技術大学)

「国際聴覚障害児の言語学習に供する電子図書の開発に関する研究——日本聴覚障害児の電子図書の開発を中心として——」

9:35-10:10 発表⑨

Kyoichi SHIMASAKI (島先京一), Seian University of Art and Design

“Large Illustrated Screen Books—A Design Project of Teaching Materials for Severe Intellectually Disabled Children by Art Students and Design Researcher —”

10:10-10:30 コーヒーブレイク

10:30-11:05 発表⑩

小泉元宏 (東京芸術大学大学院)

「社会と関わりを持つ芸術と地域社会との関係について——『関係性の美学』概念とその批判への考察を中心として——」

11:05-11:40 発表⑪

Marina MEEUWISSE, Rotterdam University of Applied Sciences, School of Social Work

“Art as a Valuable Instrument in Community Research”

11:40-13:00 昼食

13:00 ヨコハマ フィールドワーク

18:00 中華街にて夕食およびオープン・ディスカッション

3. 成果

3日間にわたって開催された会議では、フィールドワークも含め会議でも、会議の外でも活発な意見交換が展開された。またYCCの協力の下で横浜で活動するさまざまなアート・イニシアティブプロジェクトに接することで、参加者のみならず開催者も「クリエイティブシティ」としての横浜の活動を深く知ることができた。その交流とディスカッションが、そのまま教育GP「身体知教育を通して行う教養言語力育成」プログラムの「フィールドワーク」セクションと「コミュニティ」セクションの立ち上

げにつながっていき、その中の社会連携プロジェクトの一環として慶應義塾大学の横浜拠点「カドベヤ」の設立につながっていったことも特記しておきたい。なお、発表論文を始め、本会議の詳しい内容は、別途報告書として2010年に出版されることになっているので、そちらをご参照されたい。

(横山千晶)

教養研究センター

運営委員会委員（敬称略）

2009年4月1日～2010年3月31日在籍者

第4期(2007年10月1日～2009年9月30日)

第5期(2009年10月1日～2011年9月30日)

教養研究センター担当常任理事

西村 太良(2009年5月まで)

長谷山 彰(2009年6月から)

教養研究センター所長 横山 千晶

教養研究センター副所長

不破 有理

武藤 浩史

種村 和史

教養研究センター事務長

松本 実(2009年10月まで)

柴田 浩平(2009年11月から)

文学部長

長谷山 彰(2009年6月まで)

中川 純男(2009年6月から)

経済学部長

塩澤 修平(2009年9月まで)

小室 正紀(2009年10月から)

法学部長

国分 良成

商学部長

清家 篤(2009年5月まで)

樋口 美雄(2009年5月から)

医学部長

末松 誠

理工学部長

真壁 利明(2009年7月まで)

青山藤詞郎(2009年7月から)

総合政策学部長

阿川 尚之(2009年6月まで)

國領 二郎(2009年7月から)

環境情報学部長

徳田 英幸(2009年9月まで)

村井 純(2009年10月から)

看護医療学部長

山下香枝子(2009年9月まで)

太田喜久子(2009年10月から)

薬学部長

笠原 忠(2009年6月まで)

増野 匡彦(2009年7月から)

文学部日吉主任

関根 謙

経済学部日吉主任

羽田 功(2009年9月まで)

比留川 彰(2009年10月から)

法学部日吉主任

朝吹 亮二(2009年9月まで)

武藤 浩史(2009年10月から)

商学部日吉主任

渡部 睦夫(2009年9月まで)

成田 和信(2009年10月から)

医学部日吉主任

古野 泰二(2009年9月まで)

長井 孝紀(2009年10月から)

理工学部日吉主任

大谷 弘道(2009年9月まで)

金田一真澄(2009年10月から)

薬学部日吉主任

江原 吉博

日吉研究室運営委員会委員長

小宮 英敏

基盤研究座長(慶應義塾大学の教育カリキュラム研究)

伊藤 行雄

基盤研究座長(身体知プロジェクト)

武藤 浩史

日吉行事企画委員会(HAPP)委員長

小菅 隼人

極東証券寄附講座運営委員会委員長

鈴木 晃仁

日吉キャンパス公開講座運営委員会委員長

坂本 光

日吉メディアセンター所長

伊藤 行雄(2009年9月まで)

羽田 功(2009年10月から)

日吉 ITC 所長

中山 純(2009年9月まで)

種村 和史(2009年10月から)

体育研究所所長

植田 史生

外国語教育研究センター所長

境 一三

自然科学研究教育センター所長

青木健一郎(2009年10月から)

日吉キャンパス事務長 安田 博

日吉学生部事務長 富山 優一(2009年10月まで)

石井 宜明(2009年11月から)

日吉メディアセンター事務長

風間 茂彦

日吉事務運営サービス課長

酒井 秀明(2009年10月まで)

黒田 修生(2009年11月から)

教養研究センター

コーディネーター・オフィス（敬称略）

2009年4月1日～2010年3月31日

研究企画ボード

責任者：横山千晶（所長・法）

コーディネーター：不破有理（副所長・経）、武藤浩史（副所長・法）、種村和史（副所長・商）、

坂本 光（文）、伊藤行雄（経）、長田 進（経）、境一三（経）、羽田 功（経）、鈴木晃仁（経）、武山政直（経）、朝吹亮二（法、2009.9.30 まで）、金田一真澄（理工、2009.10.1 から）、篠原俊吾（法）、佐藤 望（商）、小菅隼人（理工）、熊倉敬聡（理工）、安田 博（キャンパス事務長）、松本 実（教養研究セ事務長、2009.10.31 まで）、柴田浩平（教養研究セ事務長、2009.11.1 から）

広報・発信担当

責任者：不破有理（副所長、経）

日吉行事企画委員会（HAPP）

委員長：小菅隼人（理工）

委員：坂本 光（文）、石井 明（経）、羽田 功（経）、下村 裕（法）、佐藤 望（商）、竹内美佳子（商）、森吉直子（商）、小宮 繁（理工）、森 泉（理工）、石手靖（体研）、河邊博史（保セ）、安田 博（キャンパス事務長）、酒井秀明（運営サ、2009.10.31 まで）、黒田修生（運営サ、2009.11.1 から）、土田平和（運営サ）、塚本いづみ（運営サ）、湯川哲史（学生部）、宮崎俊明（学生部）、山崎健二（学生部）、風間茂彦（日吉メディアセ）、遠藤恭子（日吉メディアセ）、日本邦昭（教養研究セ）、岩渕重夫（外国語教育研究セ）、小関克明（社会・地域連携室）

極東証券寄附講座運営委員会

委員長：鈴木晃仁（経）

委員：宇沢美子（文）、小瀬村誠治（法）、足立典子（商）、鈴木 忠（医）、高桑和巳（理工）、吉田泰将（体研）、松本 実（教養研究セ、2009.10.31 まで）、柴田浩平（教養研究セ、2009.11.1 から）、奥田詠二（大学出版会、2009.11.30 まで）、乙子 智（大学出版会、2009.12.1 から）

日吉キャンパス公開講座運営委員会

委員長：坂本 光（文）

委員：新島 進（経）、山本賀代（経）、下村 裕（法）、

大出 敦（法）、上村佳孝（商）、Cominetti, Philippe（商）、中澤英夫（医）、荒金直人（理工）、前野隆司（システムデザイン・マネジメント研究科）、佐々木玲子（体研）

教養研究センター事務局

松本 実（事務長、2009.10.31 まで）、柴田浩平（事務長、2009.11.1 から）、日本邦昭、甲賀崇司、山口 中

2009年度の主な活動記録

Date		Contents
4		極東証券寄附講座「生命の教養学」[アカデミック・スキルズⅠ・Ⅲ]開講（春学期）
5	9日	日吉キャンパス公開講座「見て・感じて・動いて味わうシェイクスピア」(6月6日まで4回)
	9日	日吉キャンパス公開講座「絵画を聞く、音楽を見る、自我の行方」(6月6日まで4回)
	9日	日吉キャンパス公開講座「創造する自己」(6月6日まで4回)
	9日	日吉キャンパス公開講座「メディア・リテラシー入門」(6月6日まで4回)
	16日	日吉キャンパス公開講座「ゲーテの『ファウスト』第1部を読む」(6月13日まで4回)
	21日	HAPP 新入生歓迎行事「ギターに生きる——坂場圭介を聴く」
	27日	HAPP 新入生歓迎行事 台湾映画『九月に降る風』上映会・講演会
	30日	極東証券寄附講座“生命の教養学”一般公開ゼミサイエンス・カフェ 12「夜の森のにぎわい」
6	8日	HAPP 新入生歓迎行事 演奏会シリーズ「啓蒙主義と音楽」1 講演と対談「フランス・ロマン主義の再発見——アルカンのピアノ音楽を中心に」
	8日	「学び場プロジェクト」ピアメンターによる学習相談アワー（7月10日まで）
	15日	HAPP 新入生歓迎行事 演奏会シリーズ「啓蒙主義と音楽」2 「啓蒙主義からロマン主義へ」寺嶋陸也ピアノ・リサイタル
	22日	HAPP 新入生歓迎行事「環境週間」(27日まで)
7	1日	教員サポート「メディアセンター・サービス活用術——少人数セミナー授業での実践ワークショップ——」
	3日	HAPP 新入生歓迎行事 演奏会シリーズ「啓蒙主義と音楽」3「転換期のチェンバロ音楽」 広沢麻美チェンバロ演奏会
	4日	HAPP 新入生歓迎行事「土のいのち～どろだんごと左官の技」
	15日	HAPP 新入生歓迎行事 演奏会シリーズ「啓蒙主義と音楽」4「啓蒙主義時代の音楽：慶應義塾コレgium・ムジクム演奏会——ヘンデル・ハイドン・メンデルスゾーン イヤーを記念して——」
	18日	極東証券寄附講座“生命の教養学”一般公開ゼミサイエンス・カフェ 13「家族で暮らすハチの話」
	26日	アカデミック・スキルズⅢ 夏期合宿「寿の熱い夏」(27日まで)
8	1日	「庄内に学ぶ〈生命〉のつながり——心と体と頭と——」セミナー・プレ企画 映画『おくりびと』上映会・講演会
	10日	夏の文学実験授業「J.M. クッツェーの謝肉祭」(8月15日まで)
	17日	「芸術と福祉」国際会議(8月19日まで)
	31日	「庄内に学ぶ〈生命〉のつながり——心と体と頭と——」合宿セミナー（9月3日まで）
9		極東証券寄附講座「アカデミック・スキルズⅡ・Ⅳ」開講(秋学期)
	10日	文部科学省の大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラムとして 「身体知教育を通して行う教養言語力育成」選定
	12日	極東証券寄附講座“生命の教養学”一般公開ゼミサイエンス・カフェ 14「身近で活躍する放射線」
	25日	知って触る浮世絵展——高橋誠一郎浮世絵コレクション学習イベント(10月2日まで)
	26日	日吉キャンパス公開講座「天からの文(ふみ)を読み解いてみよう」(12月5日まで10回)
	29日	教職課程センター・教員免許更新講習「知の最前線——教科教育の基礎としての教養」(2010年1月30日まで14コマ)
10	3日	HAPP 教員企画「コンサート：来往舎 秋・空・響き Part 2～音の舞～」(音と身体表現融合の試み)
	5日	「学び場プロジェクト」ピアメンターによる学習相談(2010年1月15日まで 月～金)
	10日	庄内セミナー「庄内物産展」日吉フェスタ参加
	14日	学び場プロジェクト「アカデミック・スキルズ公開講座1（テーマを選ぶ・決める）」
	14・15日	HAPP 学生企画「D I V E R T A ! ! 2」（ジャグリングを中心としたステージパフォーマンスショー）
	17日	芸術言語実験授業「楽器の声に託された生と死——クアルテットとコンサートを作ろう」 開始(2010年1月15日まで6回)

Date	Contents
10	22日 HAPP 学生企画「色彩と記憶の音楽」(楽器演奏と連動した映像による時間と空間の表現) 26日 教養研究センター運営委員会 26日 庄内セミナー 庄内フェア「慶應義塾と庄内:ハートの教育者・田中一貞展」(11月17日まで) 28日 教育 GP・基盤研究(身体知)プログラム実験授業「体をひらく言葉をひらく——わたしたちの物語を紡ごう——」(12月22日まで7回) 29日 「センター選書」採択 (『ジュール・ヴェルヌが描いた横浜——「八十日間世界一周」の世界——』、『メディア・リテラシー入門——視覚表現のためのレッスン——』、『イエイツ——自己生成する詩人——』) 31日 HAPP 特別企画「塾長と日吉の森を歩こう」
11	2日 HAPP 学生企画「魔法は光に乗って」(高速ネットワークによる韓国との共同公演) 4日 学び場プロジェクト「アカデミック・スキルズ公開講座2(さまざまな論点のマッピングと要約)」 9日 基盤研究(教育カリキュラム研究) 第9回センター・シンポジウム 「慶應義塾大学の教育カリキュラム研究②——4年間を見越した教養教育の研究——」 9日 庄内セミナー 「庄内フェア」食事・グッズ・スナック(11月14日まで), 図書(11月28日まで) 14日 庄内セミナー 「活動報告会」 14日 極東証券寄附講座「生命の教養学」一般公開ゼミサイエンス・カフェ 15 「アカテガニが守った小網代の谷」 18日 教員サポート・ワークショップ「少人数セミナーの指導法について——“アカスキ”のノウハウを盗もう!——」 25日 基盤研究(身体知プログラム) 詩をめぐるワークショップ「言葉と言葉、人と人の繋がりをとめて」(外国語教育研究センター共催) 30日 教育 GP プログラム 世界の今に目を向けるための映画上映会 1 『アリ地獄のような街』 30日 HAPP 学生企画「L a b y r i n t h」(光と音のメディアアート作品展示)(12月5日まで)
12	14日 HAPP 学生企画「『09→10』展」(「2009～」という視点のもとで若手作家の合同展)(12月22日まで) 14日 教育 GP プログラム 世界の今に目を向けるための映画上映会 2 「日吉映像フォーラム ショートフィルム・ティーチ・イン」 22日 教育 GP プログラム 世界の今に目を向けるための映画上映会 3 「日吉映像フォーラム 『フェンス』上映と藤原敏史監督に訊く」
1	13日 基盤研究(身体知プログラム)・未来先導基金事業「コレギウム・ムジクム演奏会」 14日 教員サポート・ワークショップ「“学生の悩みについての悩み”を解消するために——教員と学生相談室の連携について——」 15日 基盤研究(身体知プログラム)・未来先導基金・HAPP 事業「弦楽四重奏の世界 クァルテット・エクセルシオ特別コンサート」 23日 極東証券寄附講座「生命の教養学」一般公開ゼミサイエンス・カフェ 16 「メダカの♂♀のはなし」 29日 教育 GP プログラム 狂言と言語力ワークショップ「笑いの古典を体験!」
2	4日 「アカデミック・スキルズ プレゼンテーション・コンペティション」 8日 Hiyoshi Research Portfolio 2009 出展(大学 GP, 学び場プロジェクト, 庄内セミナー, 設置授業(生命の教養学・アカデミックスキルズ), 身体知の実験授業) 27日 教育 GP プログラム 感動体験WS「ロミオとジュリエット」その1 28日 教育 GP プログラム シンポジウム「ロミオとジュリエット——シェークスピアの言語と身体」
3	2日 教育 GP プログラム キックオフ・セミナー 1 「フィールドワークについて考える」 2日 教養研究センター運営委員会 3日 教育 GP プログラム GP シンポジウム「身体知と教養言語力育成」 5日 教育 GP プログラム 「ひとり語りWS」 6日・21日 教育 GP プログラム 「折田克子・川村浪子『身体知とダンス』講演会 1・2」 20日 教育 GP プログラム キックオフ・セミナー 2 「コミュニティとダンス」 22日 教育 GP プログラム 「プロセスワークWS」 27日 極東証券寄附講座「生命の教養学」一般公開ゼミサイエンス・カフェ 17 「二枚貝を覗いてみよう!!」

慶應義塾大学教養研究センター
2009年度 活動報告書

2010年8月16日発行
編集・発行 慶應義塾大学教養研究センター
代表者 横山千晶

〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1

TEL.045-563-1111(代表)

Email lib-arts@adst.keio.ac.jp

<http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/>

編集・制作 慶應義塾大学出版会

印刷・製本 (株)太平印刷社
